



次 目

大正十年と日蓮主義(時言)	本多
一、日蓮聖人と聖徳太子	本多
二、國家統治の新意識	本多
三、國防上の第一義	本多
四、日蓮主義	本多
五、精神生活と日蓮主義	本多
六、宗教擁護と日蓮主義	本多
七、思想	本多
八、思想戦の意義(法幢)	本多
九、教育勸諭と思想問題	本多
十、本經祖書要文講義	本多
十一、日蓮聖人教義綱要	本多
十二、宗門史料	本多
十三、赤化の西伯利より歸りて	本多
十四、佛陀と神明と	本多
十五、改造と信仰	本多
十六、記事報道十數件	本多

第廿五年三月號

郵便金壹錢
 拾錢郵税共
 の意味にて十二分
 らんことを
 費を計り、

伊勢國四日市市安樂寺建 立淨財勸募之辭

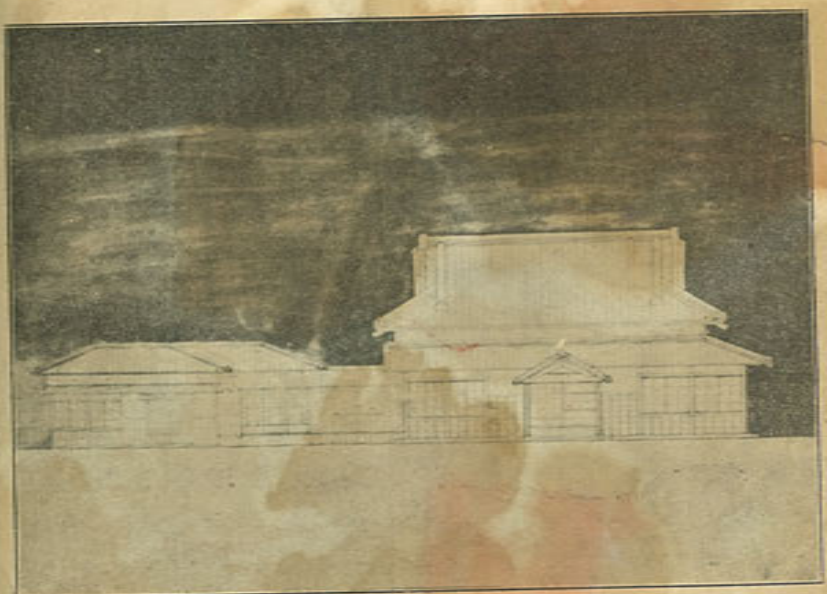
心を清淨ならしむること、米を精白にする
り、この處に詣する者は功德を成就す
果を採收するが如く、復寺は金剛道場
金剛不壞の佛身を成就す、經に云く、
其地皆金剛より成り、異滅の變あること
勢の國四日市市に於て、法華經の正義を尊重
する信男信女等、心を協せて一寺を建立せんとす、幸に靜岡縣
下に存する久根の安樂寺を移して、其寺號を襲用せんとす、安
樂寺は醍醐法皇の建立にして由緒正しき梵刹なり、建立の計畫
已に成つて將に造營に着手せんとす、希くば隨喜の諸氏この舉
を贊助し、淨財を喜捨し、以て發願を成就せしめられんことを
維時大正九年九月

寄附金勸募要項

- 一、敷地 金五千圓也
- 一、本堂兼庫裡七拾坪 金壹萬圓也
- 一、工事完成 大正拾年貳月
- 一、寄附金は東京府品川町妙國寺、名古屋市新榮町常徳寺、又は四日市市新丁向山路方第一團分團宛申込及納付ありたし、

發願人 本多 日生
國友 日 斌
山路 元 吉
兒玉 小 治
佐藤 柳
服部 隆

山路 元 吉 寄附



伊勢國四日市市安樂寺正面圖



時 言

大正十年と日蓮主義

目 次

- 一、日蓮聖人と聖徳太子
- 國家統治の新意識
- 國防上の第一義
- 墮落の匡救と日蓮主義
- 五、精神生活と日蓮主義
- 六、宗教選擇と日蓮主義
- 七、思想戰と日蓮主義

本 多 日 生

一、日蓮聖人と聖德太子

「年の新年を迎へまして、お互に健全であつて引續いてこの講壇に於て法華經竝に日蓮聖人の教を信仰を磨き、思想を練り、さうして國家に御奉公を致すのは、洵に慶ばしいことと思ふのであります。本年は日蓮聖人御降誕の七百年に相當致しまする爲めに、吾々日蓮門下の者は一段の活動をとりまして、その御降誕と申すも二月でありますこと故に、この新年の氣分が終ると同時に聖誕の記念運動が各地に起ることであらうと思ひます。本年はこの意味に於ても特に喜ばしい年であると考えへます。又一方は聖德太子の千三百年に相當致しまするので、これも十分の計畫が數年前から立てられて居るのであります。宮中の方からも過般六萬圓の御下賜金があつたやうな譯で、本年は聖德太子の千三百年報恩の事業として、佛教復活の運動が強く現れて來ると思ふのであります。これも特に大正十年の新年に於て欣ぶべき希望の一つであると存じます。

二、國家統治の新意識

更に眼を放つて大きく考へますと、この日本の國家の統治方法が、本年に於て餘程改つて來るやうに思ふのであります。それは從來の單に法律上から考へたる施設、或は經濟上からの施設ばかりでなくして、確かに國家の統治方法に於て、先づ第一は社會政策の方面が變つたことに相成つて參らうと思ひます。現に内務省にも社會局が新設されて居りますし、東京市にも社會課が設けられて居りますやうな譯

國家統治の方法に於て新たなる施設が起るのは、洵に喜ばしいことと存じますが、中にも從來の社會政策といふのはやはり法律上、經濟上の事からのみ考へて居りましたけれども、この社會の根本政策は、民衆の精神教化に在ることが明瞭分つて參りました。内務省で計畫されて居る民力涵養の運動も、一段と精神教化の方に力を盡すやうに相成る次第であります。文部省に於ても社會教育と申しますか——近頃は社會教化といふ言葉を使はれるやうになつて參りましたが、これも餘程の進歩であらうと存じます。勞資協調會の方に於ても、勞働紛争に對して和解でもする事がその任務であるやうに考へられて居りましたが、今日は大に進んで、勞資の協調は決してストライキの仲裁では無くして、資本家なり勞働者の人格に對して精神教化を與へて、彼等に眞の思想上の自覺を促さんければ、勞資の協調を全ふすることは出來ない。それ故にこの勞働問題の根本解決は、やはり精神教化に在るといふことを、確かに自覺せらるるに至つたのであります。それは極く新しいことで、大正十年になつてからその意味が段々世の中に判るやうにならうと思ひます。左様にして國家統治の方法の上に、精神方面に力を入れるやうに相成つて來る年でありまして、上の一世紀元を劃すると申して宜いと思ひます。各政黨の間にも思想問題の調査會は設けられて、今迄は調査であつて、どういふ風にしたら宜いかといふ考がはつきりしなかつたのであらうが、多分この機會に於ては思想の善導に、各政黨とも力を盡さんならぬといふ自覺が明かにな

三、國防上の第一義

尙ほ他の方面を考へますと、國防上の第一義が明かになる年であり、今迄は武力が國防上の第一要件だといふ考の人が多かつた、達識の人は從來とても國を護るのは軍艦や鐵砲ばかりでなくして、國民だといふ事を考へて居りましたけれども、多數國民に於ては國防と申しますれば、やはり軍備の事だに考へて居りました。所がその事が段々研究が進んで參つて、國防を全うするには經濟的平和の入れなければならぬ、のみならず思想の開ひに就て國民の思想を維持して行かなければならぬの第一義——根本の畫策は、國民の精神を鞏固に鍛へ上げるにあることが理解されるに至る年であり、これが又鮮かに大正十年よりして、その思想が各方面に發揮されて參ることを私は認むる者であります。

左様にして一國の大事の國防が、その第一義に於て國民の思想を健全にしなければならぬといふ事の自覺が、國民全般に普及し、國家統治の方法の根本精神は法律經濟でなくして、これ亦民衆の精神教化に存することが明かになり、社會政策の要訣も經濟上の政策ではなくして、やはり精神方面に第一義が存し、勞資協調の問題もストライキの仲裁ではなくして、富豪と勞働者の精神教化に存することの自覺が起りまして、それが國民全般に汎く行渡る時には、非常に思想の問題が勃興して參ることであらうと思ひます。さうしてその半面に於ては危險思想の者も、これは部分的ではありますけれども、段々進んで參つて、氣が荒くなつて參り随分露骨に狂激なる思想を發表し、若くは宣傳し、種々なる手段を採るやうになつて參りましたから、左様な不健全なる思想の刺戟が、國民の間に起つて參るのであります。又露西亞に於ても亞細亞を征服する爲めに、殊に日本に對し、危險思想を以て弱らせなければならぬと力を打込んで居るやうな事があるが、日本人に明かに自覺されて參るであらう。吾々は早くよりこの考を有つて居りましたけれども、一般國民はそこに氣が附かなかつたやうに思ひますが、どうしても「彼等は其處に力を入れて居るものぢやナ」といふ事の自覺が起つて參らうと思ふ。左様にして恐るべき社會主義なり危險思想なりの露骨なる運動と又露西亞の宣傳と相俟ちまして、國民には警戒の精神が十分に起る譯であらうと存じます。大部分の國民は大正十年に於て、はつきりとこの思想の健全に力を盡すやうになつて參らうと思ひます。

四、墮落の匡救と日蓮主義

その場合に吾々は日蓮主義者の立場から考へまして、色々役立つ點がありますが、特に私は三點の事柄は、この日蓮主義者の活動が現代の國家を救ひ、今後の文明を指導するに足るべき偉大なる文化を有つて居るといふことを認めるのであります。この三つは實に日蓮主義者が天下に誇るべきものであると信ずるのであります。

これは何かと申しますれば、第一現代を累するものは、餘りに物質方面に墮落をした點でありまして、この九つは、最早や議論の餘地の無い程明らかになつて居ることであり、先刻來も野口僧の「エフスク」その他バルチザンの跋扈した方面の状況をお話になりましたが、彼等は物質に於てのみ幸福を考へて居るのでありますから、他人の財産を掠奪する事、若い女を掠奪する事を以て、其から幸福が湧いて來るやうに考へて居る所の暗愚なる者共であります。これは極端な者でありますけれども、其處まで行かなくても、世界を通じて今果をして居る所の勞働爭議、或は國際關係、その他權謀術數

至らざるなきこの世界の不穩といふものは、要するに人類が餘りに物質的慾望に流れて居る所の弊害であります。口に正義を唱へましても、腹の中が唯だ劣等なる慾望に墮落して居るが故に、斯の如き災禍を持

居るのである。併ながらこの墮落は非常な強い力でありまこと故に、尋常一様では之を救ふ事

は、通常の道德の議論、修養の話、或は宗教の説法に於きましても、皆それは精神生活を説く

けれども、生ぬるい、根抵の浅い、力の足りないやうなものを以ては、この強く墮落して居

る人を救ふことは到底出来ないものである。日蓮主義は精神生活を説くといふが、唯だ説くので

はない、日蓮主義はどうしても精神生活に來らなければならぬ所の、非常な強大なる力を有つて居るも

のであります。それは日蓮聖人の一代の經歷と、血と涙を以て造り上げた所の日蓮主義の歴史、日蓮主

義の教化といふものは、これに觸れさへしたならば、必ずや如何に墮落したる人間も、進むべき前途に精神

の光を認めなければ止ぬものであります。それは日蓮聖人が頭の座に坐つて頭を斬られることになつたな

らば、物質の方から言へば最早や絶望である、併ながらその頭を斬られる刹那に於ても「これ程の喜びを

笑へかし」と言つて、その死の刹那に於ても喜びに生きて居つたが如き、或は佐渡ヶ嶋の彼の寒い雪の中

に、一間四面の辻堂に、布圍も無し凍へて居つて、而かも「日蓮の如く喜び身に餘る者はよもあらじ」と

叫んだが如き、これが日蓮主義であります。この強烈なる力を有するが故に、如何に心の痺れた人間でも

日蓮聖人の傳記を読み、日蓮聖人の遺訓に觸れたる時には、必ず精神生活の力を得て參るのであります。

これは宗教の偉人には何れも皆卓越せる所がありますけれども、全く日蓮聖人の一代は血と涙を以て編み

成されたる活動であつて、現代の重き墮落に陥れる者を救ふに適したる所の大良薬となつて居るのであ

ります。それは他にも似たやうな話はあるけれども、生ぬるい。日蓮聖人の丁度重病患者にモルヒネを注

射するやうな譯で、どうしてもその病は癒えざるを得ぬのである。これは宗教家の傳記の中に於て、日蓮

聖人が東西古今に卓越して居る所以である。又これだけの史實を造るべく、日蓮聖人は自ら難に赴いて千

辛萬苦を嘗めつゝ、其處に歡喜を懐いて居られた、日蓮聖人は今日の墮落を豫想して、この末代の人を救

ふには身を斷頭場に置き、或は雪の中に埋めてかゝらんければ、末代のこの物質的墮落の人を救ふ事は

出来ないとい先見せられて居つたのである。この點に於ては二宮尊徳翁がどうであるとか、或は白河樂翁公

がどうであるとか、誰がどうであるとか言つて實例を出して來ても、逆も比較にはならぬ、話の種も少い

し、大體生ぬるい。日蓮聖人の實に材料が豊富であつて、強烈であつて、刺戟が強い、如何に痺れた人

達でも、日蓮聖人の傳記を靜讀するか、又は日蓮聖人の遺訓を拜讀致しますれば、どうしても心身を動か

さざるを得ない。この物質的墮落の現代の重患を剔抉する力を、日蓮主義は有つて居るのであります。

五、精神生活と日蓮主義

ふべきは、即ち精神生活の教を與へる點であつて、之を個人々々の上に於て説くのみならず、

の根本に於て教を尊ぶべき所以を力説したのであります。同じ様に宗教を説きましても、個人教

のみに満足して終る所の宗教もありま、却つてこれが今日までは立派なやうに言ひなされて居つ

た、宗教は別なものであるといふ、別なものであるといふのは即ち個人對手の教化であるが故に、國家

の統治とは關係を離れて宗教を觀て居つたのであります。それ故に國家の盛衰興亡を除所に見て、法然上

人が念佛三昧に入つて居つたやうに、或は一休和尚がバツチョ笠を擔いで漂浪の生活に居つたやうに、「國家が減びやうが何も俺に影響はあはせぬ、お日様は何處にも照つて居る、青い草は何處にも生へて居る、根や人參は何處でも出来る」といふやうな事になつて行くのでありますから、個人としては平和な生

きて居ても、この思想は一步誤れば、人文を毒する所の危険思想となるのである。現代の病弊の最も恐

ろ何かと言へば、この國家の組織を破壊せんとすることである、それが物質慾の方から來て社會主義を呪ふのも、精神生活の方に入つて行つて國家の存在を有難く思はないのも、結果に於ては一つである。この精神生活を力説しながら併せて國家の大切なる所以を明かにし、所謂國家的教化を打立てたのが日蓮聖人の立正安國の主張である。社會政策上に就ても國家を餘所に見てしまつて、社會本位の上から貧乏人の味方をするといふやうな所から立て、行けば、やはり社會主義的傾向を取るものである、宗教も國家の組織を餘所に見て行くといふと、「國家などは俗事である、政治などは劣等なものである」といふことになつて、己れのみ高い神の前に清き生活を爲すと考へるのである。墮落してパンの爲めに國家を呪ふのも、清き眞如の月を眺めつゝ國家を忘れるのも、忘れるに至つては一つである、その大切な所を打込んだのが日蓮主義である。その最も露骨なる誤謬を有つて居るものがトルストイの田園生活である。又日本で申しても極端なる超越的主義を取つて居る宗派があります、「人生の是非善惡みなこれは夢である、親が死んだのも鳥が死んだのも同じ事である」といふやうな事を言つて、悟つたやうに言うて居る者がある、「國が減びたと言つてもナニ山も河も崩れはせぬ、同じ事ぢや、統治權ナンといふものは誰が統治して居つても此方は始めからバツチョ笠かついて漂浪の生活だから構ひはせぬ」といふ、それは支那でもさういふ主義

を以て佛教を宣傳した者があります、耶穌教の中にもさういふ者があります、トルストイなども、あ

即ち耶穌教の主義に依つて反國家的思想を鼓吹したる人でありませぬ。所が日蓮主義は精神生活のそこに國家本位の觀念を十分に教へて參るのであります、これは實に立派な事でありませぬ、唯だ日蓮聖人が「法を知り國を思ふ」とか「正しきを立て、國を安らかにす」とか言つて、そこに國家觀念があつたといふ位の事ではない、日蓮聖人の主義は實に模範的な思想である、軍人が單に表面から忠勇義烈を考へて居るだけでは、最早や今日は役立たぬ、思想の根本からして組立て、その結論が日本の柱となるといふ所に行かなければならぬ。これは獨逸のカイゼルが嘗て言うて居る、日本の愛國心は初心なる所の愛國心で、唯だ歴史的傳統から來て居る所の觀念である、種々なる思想の闘ひを経て、所謂千軍萬馬の巷を經來つて、さうして勝利を得た愛國心ではない、思想上に於て未だ闘はざる愛國心であるから、異つたる思想が之を襲うて攪亂したる時に於ては、日本の愛國心は必ずや動搖をすと言つて居つたのである、今が即ちその時期に達して居るのではないか。日蓮主義は深遠なる人生觀でも宇宙觀でも、宗教の信仰でも道德論でも、あらゆる思想の中に這入つて、「高いやうでも國を忘れるやうな思想は許さぬぞ」といふ、千軍萬馬の戰場に於ては、愛國心である。この點に於て、大正十年の思想界の教化に従事する人々の爲めに教ゆべきを有つて居る事を、日蓮主義は誇とするのであります。

六、宗教撰擇と日蓮主義

もう一つ此處に大事なるものがあります、それは段々お調べになつたならば、どうしても精神生活のそ

こには宗教が無くてはならぬといふ事を、領解するであらう。その宗教に戻る時にはどうしても日本は佛教より外ありません、神道は宗教として考へれば素材なものである、國家の經綸から考へれば神ながらの是に大切なものであります、その根本を爲すものであります、之を宗教として考へた時には、幼稚ある、神ながらの教が宗教としても總てに誇るべきだと思つた時、それは頑冥固陋といふ事にならぬ。そこでさういふ幼稚なものはこれは思想の闘ひの上に於ては、第一戦列に立つことは出来無い。思想の闘ひに進んで行く上に宗教必要なりと考へた時には、日本では佛教に戻つて来るより外はない。そこで佛教に戻つて人心教化の基礎を其處に置かうとした時、これ亦日蓮主義に依らんければ、この佛教の眞實を明かにすることが出来ない、お經として考へた時にも七千餘卷の經卷がある、佛教が宜しいと言つて大藏經を抜けて見た所で、さて何れにその歸趣歸結を置くかといふ時には、日蓮主義に依らずして大藏經をお調べになつても、目鼻のつくものではありません。それならば御經の方は縁が遠いからといふので、宗旨の事から調べることになつて、さて眞言宗がよいか禪宗がよいか、淨土宗がよいか三論宗がよいかといふ事になつて調べて行く時にも、この宗派の異同に就て明確なる結論を與へるものは、日蓮主義を指しては他にはありません。それは今迄のやうなお座なり主義を以て「何でも宜しい、佛法であれば結構です」と言つて、未來觀に流れて居つても、超世間的であつても、有耶無耶であつても何でも構はぬと言つて誤魔化して行つて、役立つならば宜しいけれども、今後の思想の闘ひは左様な生ぬるい曖昧なるものを以ては、人心を教化することは斷じて出来ませぬ。其處に至つては又一個の光を日蓮主義が有つて居ると言はなければならぬ、それはお經として調べたならば、一切經を貫いて之を開顯統一して法華經

歸着を教へて居る點に於て、實に立派なものであります、宗旨の議論として言ふならば、「この宗旨には此處に採るべき所があるけれども、併ながら此處に大缺點がある」或は「此處にこんな遣り損ひがある、許せない所がある」といふことを剔抉して、洵に明白にこの佛教の應用の誤謬を教へて居るのであります。折角佛教が復活しやうといふのに、その古疵を呼起すやうな愚な事をやるのは、國家の爲めに大損害であります。未だ日本の政治家にもお座なり主義の人が多からう、精神生活が必要だ、民衆教化が必要だといふことが解つただけで、餘程有數の人とせねばならぬ。成る程これは信仰も大事だナ」といふ位の所で、「蛙の頭でも構はぬ、拜めば宜しい」といふやうな事を言ふのであるから、實に幼稚なものである。併ながらさういふ幼稚な事を以て到底今後の民心を導くことは出来ない。西洋に於て思想の動搖したのは、そこに宗教の議論も入つて居るし、色々のものがあつた、それを皆はね返して來た今日であります、宗教を知らずに捨てたものではない、宗教も舐れるだけ舐り、研究するだけ研究して、根據の弱いものは皆はね返し、して來たので、實は基督教が根柢が淺薄であつたから、學問の方から破壊されたのである。そのころにも生ぬるい好い加減なものを以て之を信ぜよと言つた所が、この思想戦の中に於て、やはりは、終ふのである。それ故に茲に宗教の必要を自覺し、佛教に戻らんとする時、その指導を仰ぐべきものは誰であるか、佛教の觀方佛教の教化方針を教ふる者は、全く日蓮主義であります。其處まで神講話が必要になつたから、「宗教が必要であります」といふやうな事を言ふけれども、「必要は判つた、それからどうするか」と言へば「一寸待つて呉れ」といふやうなもので、洵にそれは危ない話である。そんな

な事て逆も行くものではない、何處までもそれは信仰に依つて命まで捨て、頸の座に据へられても、雪の中に閉ぢ籠められても、精神の光に活きるといふ、確乎不拔の信念に到達しなければならぬので、茲に日蓮主義の光が輝いて居るのであります。

三つてあります、即ち誤れる所の物質墮落の大弊害を匡救する所の唯一の力として、又精神生活とこの調節を教ふる點に於て、又佛教に戻る時佛教應用の正しき方針を教ふる點に於て、日蓮主義のものであらうと思ひます。

七、思想戦と日蓮主義

更にモウ一つの附加へて言ふならば、日蓮主義が有つて居る所の勇往果敢なる折伏の精神である。今後の思想の戦ひは、誤つた思想を唯だボンヤリ傍觀して居るといふ事ではいかん、今日の日本人の大なる病は總てが悪くなつて居る譯では無いけれども、善い者は唯だ涎を流して傍觀して居る「そらい事を言ひ出したナリ」と言つて居る、その間に毒思能が蔓延するのである。日蓮が叫びしが如く、國家を誤るものは思想である、左様な誤つた事を言ふ者は許せないと云ふ事に依つて、日蓮があゝの通りの熱烈火を吐いて攻撃したるこの精神に戻らなければならぬ。他の國が生ぬるく、思想の戦ひを自由であるとかいふやうな事を言つて、間違つた思想でも何でも勝手次第に蔓延を許したから、それが爲めに遂に露西亞はア、いふ事になつて居るのである、英吉利や亞米利加はそれには感榮れないと言つて居るけれども、ア、いふ調子で行つて果して過ちを取らぬかどうかは疑問である、危ない橋を渡つて居るのである、ア、いふ調子でやつて行

居つたならば、やはり同じ轍を履ひかもしらん「履まない」と言ふて居る人もある、イヤそれは危ないのぢや」といふ者もある、吾輩は「危ないものぢや」と言ふに躊躇せぬ。支那がどうであるかと言へば、是れ亦頗る危ないものである。それは健全なる思想に居る者は、左様な間違つた觀念を折伏するが、眞の新しき文明だといふ事を知らない。間違つた思想を涎を流して聽いて居るのを、氣の利いた文明人だと思ふ誤つた觀念を有つて居る。今日日本にもさういふ人が多い「イヤ、言はして置くが宜いぢやないか、そんな事を向ふが勝手に言ひ居るのだから……」と言つて、間違つた思想の傳播を涎を流して聽いて居る、それが氣の利いた人ぢやといふ大誤解を有つて居る。日蓮聖人はそれを何と言つた「謗法を責めずして自分ばかりが信心して、間違つた思想の攻撃をしないやうな者は逆も成佛は出來ない、俱々に與同罪になつて、地獄の底積になる」とまで、之を論じて居る、茲が日蓮主義の特色である。この降誕七百年に當つて唯今申した四つの點を發揮することに於て、日蓮主義は日本に役立つことを證明し得るのであります。

これは新年に於ての所感の一節であります、新しくこの講壇に立つに當つて、日蓮主義の爲めに吾々諸君を繼續し、諸君等の援助を受けて今後何等の御用を務めて行くには、唯今申したやうな點に就て

* * * * *



思想戦の意義 (其三)

本 多 日 生

一、信等の五根とその譬喩

そこで釋迦如來は、この信根といふは恰かも濁れる水に玉を入れるればその水が澄むが如きものだと言つて居る。それから念根といふは、絲を以て華を買くが如きものだと言つて、善い事を覺えたと言つても一つ覺えて一つ失つては駄目である、親孝行の者が嫁を買つた、嫁を可愛がるのも道德であるが、嫁を可愛がる爲に親孝行を忘れた、今度また親しい女中が来た、その女中を可愛がる爲に嫁を忘れた、その中に友人から植木鉢を買つた、その植木鉢が大變よいと思つたら女中を忘れてしまつた、さうして終ひには植木鉢ばかり大切に、他の事は皆忘れると云ふやうな事になつたならば、洵に馬鹿な人である、此八折角呉れた植木鉢だから水もやるが宜いけれども、植木鉢の爲に女房を忘れてはいくまい。所が今の

はそれと同じ馬鹿が一パイ居る。一つの花を拾つても一つの花を捨てたら何にもならぬぢやないか、牡丹の花が綺麗だと思つてそれを拾つて手に載せた、所が今度は芍薬の花があつた、その芍薬を拾つた爲に牡丹の花を落す、一つ拾つても一つ落しては何にもならぬ。同じ一つでも若も一錠銅貨を拾つた爲に拾圓金貨を落したならば九圓九拾九錢の損である、女房を買つた爲に親孝行を捨てたといふ事になれば、九圓九拾九錢どころではない何百萬圓の損か分らないぢやないか、植木鉢を大切に女房を忘れたら何十萬圓の損か分らないぢやないか。さう云ふ様な愚な事をやらんやうにして行くのが、絲を以て華を買くが如く、良い華は皆絲に通して之を頸に懸けて、花輪にして行く様にしなければならぬ。新しい文明、舊い文明と言つて、新しい文明を迎へれば舊い文明を皆捨てると云ふやうな事を言ふが、これは一錠銅貨を拾つて拾圓金貨を捨てても宜いと云ふ手合である、新しい物に善い物もあるし、古い物に善い物もある、新しい物に悪い物もあり、古い物に悪い物もある、四句分別と言つて天台も言つて居る、物を考へる時分にはそんな事は極つて居る、新しい物が必ずしも善い物ではない、善い所もあるが悪い所もある、古い物にも善い所九拾九ある、新しい物に皆善いといふのは間違ひである。そこで善い物上を以て貫くが如くにせよといふのである。それから精進根は、前に言ふ通り重圍に陥つたる司の軍を助ける爲に援兵を送るが如きものである、定根は滴れの石を穿つが如きものである、そこに精神を集中しなければ、大事は成就するものではない、愈々大切な事は心が落つかなければ駄目である、針仕事をするのも愈々大事な所を縫ふのであつたならば、ベチャクチャ話をして居つては駄目だ、やはり

そこに精神を集中しなければならぬ、愈々大事な字を書くとなつたならば、話をしながらはいかぬ、やはり精神が統一して居なければならぬ、歌を唄つても音楽をやつても、本當にやらうといふ時にはやはりそこに統一集中しなければ、本當のよい歌は唄へるものではない。相撲取でもさうである、愈々土に時には、一切を捨て、そこに力を集中する、その時特別な力が出て来る、四股を踏んでやつて無いら所(無いら所)の一種特別な力が出て来ると云ふ、何時でもその力があるといふのではない、そこに精神を專注する時に於て、一種特別な力が出るので、それは即ち滴れの石を穿つが如きものである。それから慧根は門を衛る番人の如し、丁度衛門に番兵が居つて、出入する者を一々「お前は鑑札があるか、無ければ中に這入つてはいかぬ」と檢める、若し此奴はどうも胡亂な奴だ、油斷のならぬ奴だといふ事になれば内に入れない、それでも無理に入らうとすれば、銃劔を突つける、門の内には兵士が二十何人も控へて居つて、ピー／＼と笛を吹けば皆出て来て逐出してしまふ。さう云ふ工合に人間の心にちやんと警戒をして置かねばいけない、悪い思想が這入つて来た時には直ちに之を撃退する準備をして置くのが慧根である。今の學者の慧根といふは、この番兵が居眠をして居る、中の兵士の二十何人も皆グウ／＼寝て居る、だから泥棒であらうが探偵であらうが敵兵であらうが、鼻唄を唄ひながら這入つて来る、それを歓迎するといふやうな有様である。食物に譬へたならば何でも食ひさへすれば宜いと言つて、胃の害になつても構はぬ、腐つた物であらうが毒であらうが、手當り次第に食ふが宜い、そんな物を食つては悪いナンといふのは意氣地が無いと言ふと同じである。一菜一汁と雖も害ありや害なきやを注意しなければ、決して食べきものでない、それが永年の祖先の經驗に依つて、この物は食つても宜しい、これは食つては悪いと云ふ事が分つて居るから、同じ菜葉のやうでも毒の有るものは食へない物である、この菜葉は食つても宜しいと見分けて居るのである、新しい名も知らないやうな菜葉を持つて来ても、そんな物は迂つかり食ひはしない、新しい物は毒が有るとも無いとも未だ試験が済んで居らぬのであるから、新しい物には警戒を要するのである。さう云ふ様にこの智慧を活用して行くと、前に言つた煩惱が無くなつて来る、瞋慧、貪慾、愚癡、鬭争が除かれて来るのである、今申したこの五つの事が五根といつて、善き事の根本である、善根功德と佛教でいうが、この根から芽を吹いて来なければならぬ、餘所からの借物では駄目ぢや、信心でも、「友達が勤めるから僕も附いて行つたけれども、友達が大阪に轉勤したから僕も行かなくなつてしまつた」、そんな信心てはいかぬ、自分の心に芽を吹いて進んで行かなければならぬ。

二、惡魔外道と危險思想

家は斯の如く精神教化に重きを置いて、これが人生を救ふ根本である、政治もこの教化を離れては目的を達することは斷じて出来ない、經濟も我が教を離れては決して完全なる結果には達し得ない、家庭も個人も我が教より離れたものは、眞の幸福に達し得ないと斷言したものである。私は今にして考へて見れば、釋迦は實に人類最大の達人であると思ふのであります。吾々は無論政治に尊敬を拂ひ、經濟に尊敬を拂ひ、總ての學問に尊敬を拂ふ者である、併ながらそれ等の事は始終動搖變化を免かれぬけれ

ども、釋迦の教のみは三千年少しもその變動を受けない、今にして靜思するに殊にこの人類の爲に尊といものは、思想を善導する所の教であります。釋迦が惡魔外道は恐るべしと言つたが、その惡魔外道といふは外ではない、思想である、釋迦が言ふ所の惡魔とは、決して頭に角が生へて居るとか、顔に三つ眼玉がある云ふものを言うて居るのではない、如何なる美しい顔をして居つても、今言ふ悪い思想を有つて居る外道の輩と言うて居るのである。故に釋迦が五天竺を風靡して邪見外道を撲滅したと云ふことは、於て言へば、第一危險思想を擊退したのである、その當時危險思想といふ言葉は無かつたけれども、自分の利害の爲に國を忘れ、自分の都合から親を忘れるやうな惡人は昔もあつたのである。故に釋迦如來は國を守る所の守護國界といふ事を盛んに説き、四恩を説いて、第一は親に孝行をし、第二は人間互ひに仲よくして行かなければならぬ、第三は國王の恩を重んじなければならぬ、第四は天地の恵みに感謝して行かなければならぬ、この優しき精神を本にしなければ人類の幸福は無いと言つて、四恩の教を立てられたのである。色々今は屁理窟をいうて、人間を道徳的宗教的に導く事をやめて、單に利害關係を本にして算盤から割出す、權力關係を本にして法律から割出さうといふことに依つて人類を導いたけれどもそれは明かに大失敗であつた、その弊の流れる所遂に今日の如き過激思想が蔓延して、あらゆる國を破壊し、その國民を不幸に導いて居り、我が同胞數百人を慘殺するに至つたのである。

三、尼港事件と國民の自覺

この我が同胞が慘殺されたといふ一事に於て、日本國民は思想の恐るべき事を能く考へなければならぬこれは露國といふ國が日本人を殺したのではない、獨逸といふ國が殺したのではない、悪い思想が吾々の同胞を可哀さうな目に遣はして、女は股から引裂いて殺し、小さな子供は煉瓦塀に頭を打つけて南瓜を割るやうな事をして殺した、之を見て憤激しなければ人は無い、茲に公憤の無いやうな者は道徳觀念も無ければ、同胞を愛する觀念も無い冷血動物である、自分の可愛い娘や自分の大切な夫が殺されたも同じ事ぢやないか、その遺族の人であつたならば、非常な強い感じを有つてあらう、現にその當時何處かに於て追弔會の時分に、バルチザンの像を捧へて、それを斬つた所が、その遺族の女の人が見て居つて昏倒したといふ、あゝいふ者の爲に自分の夫、自分の子供は慘殺されたのかと思つて、悲哀極つて氣絶をしたといふが、その慈傷の感情を察しなければならぬ、之を他人の事だと思ふやうては國民の好誼といふものがない。どうしてもこの靈を慰めるが爲には、彼の地方に對して日本の國威を張るのは無論の事であるが、**國民は思想の上に覺めなければならぬ、私はこれが徒死にならぬやうに、この七百人の同胞が犠牲**に依つて、惡思想を擊退する事をやらねばならぬと思ふ。その惡思想の集團が彼の事件を惹起してあるから、國際的にやつたならばその國を膺懲するのだけれども、思想の禍ひであるが故に、その惡思想を擊退しても、之を日本國內に於て驅逐するのみでなく、他の世界の國々とも協力して斯の如き人類を毒する惡魔外道の邪思想を、露西亞全體に於て撲滅し、支那に於ても之を撲滅し、斯様な間違つた思想に彷徨うて居る文明を矯正して、之を救済する所の急先鋒となる事に於て、始めて七百人の靈を慰める

ことが出来やうと思ふ。彼等七百人の同胞に對する追善としては、日本の内には一人も左様な危険思想、悪思想の者は存せしめない、之を思想の上に於て撃滅し、進んでは如何なる方法を執つても左様な思想の者は膺懲することとして、始めて彼等の靈が慰められると思ふ。悪思想が敵國である、日本人の中に於て思を有つて居る者は敵國人と同一である。夫が敵國人になつたり、息子が敵國人になつたり、日本魔となるならば、この位い嘆かばしい事は無いから、自分の力の及ぶ限り之を矯正して行かなければならぬ、中學校の生徒に「思想の事は自由だから」ナンと言はれて、親父が「大きにさうぢや」と言つて吃驚りして居るやうてはいかぬ、「今頃思想の自由ナンといふ事を考へて居るやうては駄目だ、國家の狀態を何と思つて居るか、この馬鹿者がツ……」といふ位にやらなければならぬ、そんな思想の自由といふ位の事てまごつくやうな親父は駄目ぢや。思想の自由とか言論の自由とか、そんな事は古い、國家の興廢存亡の岐れる時に於ては、國民は生命財産を擧げて國家の爲に奉公しなければならぬ、而して今やその時である、何處迄も日本國民は思想の戰の意義を理解し、悪思想の恐るべきを自覺して、それには日蓮聖人の如き偉大なる信仰を持ち、釋迦如來のやうな卓越せる偉人を戴き、釋尊を以て我が思想戦の總指揮官とし、日蓮聖人を急先鋒として、吾々はこの思想の戰場に進軍しなければならぬのであります。

* * * * *



教育勅語と思想問題

本 多 日 生

一、緒 言

語が過去に多大なる貢獻を爲した事は今更
 ばいこと、煥發せられた當時既に日本の
 思想は、餘程歐化主義に流れて居りまして、
 或は西洋の實利的思想の爲に在來の日本の精神的美
 風を失ふ傾もあり、又は法律思想の爲に從來の徳
 教化を輕んずるやうな思想もあり、西洋の自由民

權の思想の爲に我が國體國風の根本を傷つけるやう
 な考もあり、種々様々なる西洋の思想の影響を受け
 て、我が國民の思想界に憂ふべき徵候を呈した爲に
 先帝陛下がこの勅語を御發布になつたのでありまし
 て、その勅語御發布前にそれらの人々に對して我
 國の思想界の事を御下問にもなり、又之を善導する
 に就ての御趣意に於かせられては、種々聖慮を煩は
 し給ふた事を承つて居るのであります。時は明治

二十三年國會開設の間際でありまして、政治上の思想の爲に思想界に變動を來さんとして居りました、當時國會が開設せられましたも、欽定憲法に關しての違ふ者があつて、第一回の帝國議會の時

我國の政治界は種々なる紛雜を極めて居てあります。爾來責任内閣といふ問題が今日まで繋がり、又新たに今日はデモクラシーの思想が入りまして、我が國民道德の根柢をも動搖せしむるかの如き觀を呈するに至つて居るのであります。當時教育勸語の煥發無かりせば、今日の日本の思想界はこの有様ではなくして、數段の歐化主義に流れて今頃はどのやうな事になつて居るか分らなかつたのであります。この勸語煥發の爲にそれ、反省を致して、漸く先づ思想の安定に向つたのであります。又之を指針として我國の學校教育は指導せられて來て、教育の効果を擧げた事でありませぬ。その結果と

して日清日露の戦役にも勝利を占め、又世界文化の中に相當なる地歩を占むるに至つた事は、その本に戻つて考へますれば教育勸語の力大なりと言はなければならぬのであります。先帝の下し給ひし詔勅は多々あります、軍人への勸諭、又明治維新當時の五箇條の御誓文、憲法發布の詔、その他戊申詔書等多々有力な詔がありまして、孰れおろかはありませぬが、最も一般的に國民の間に効果を顯して居るのはこの教育勸語であらうと思ふのであります。明治天皇の神宮鎮座の式典を明日に迎へた今日、教育勸語の煥發三十年の紀念を昨日に送つた今日、「教育勸語と思想問題」の講題の下に卑見を開陳する機會を得ましたことは、私の洵に光榮とし欣幸とする所でありませぬ。

この勸語が左様に多大な効果を我が文明に現して居る事は、今更申すまでもありませぬが、但しこの紀念會を終つたとするならば、實は是は暗愚な態度であります。

勸語の解釋及び應用に於て一點の遺憾無く今日まで行はれて居つたか否かと申しますと、私はその解釋にも誤りがあり、應用にも缺けたる所がありはせぬいか、この紀念會を迎へても唯形式に「有難かつた」といふ言を交換するだけでは、先帝に酬ゆる所以ではなからうと存じます。若もこの教育勸語の解釋及びその應用に於て缺けたる所があり、誤つたる所があつたとしましたならば、茲に大反省をして一層その御趣旨のある所を正當に理解し、正當に應用し、一段この勸語の効果を徹底せしむるやうに致さんげはならぬと思ふのであります。近來國民のすくなく多く形式に流れ、表面を糊塗することを以ては、大勢相集つて三鞭酒でもぬいて「目出度い」と言へばそれで祝意を表し得たものと思つて居る人もあるやうでありますけれども、左様な事を以て今日

それに就て自分は聊か卑見を申述べたいと考へますが、今の思想の傾向の中には教育勸語を時代遅れの思想として漫りに罵る様な不謹慎な謬想を懷いて居る者があります。それは全然西洋の思想にかぶれて彼の極端な民權の思想、或は誤れるデモクラシーの思想、或は共和民主政體を憚れる所の思想、その甚しきに至つてはサンデカリズム或はボルシエイズム等、様々なる所の狂激なる思想を謳歌致しまし、教育勸語を古い道徳なりと臆面もなく罵る者も出來て居る譯であり、且又勸語を違奉し捧讀をして居る者も、唯だ文字を捧讀し、形式にこれを戴いて居つて精神はこれに反對した様な意識觀念を有つ者が次第に殖えつゝあるかの如く聞き及んで居るのであります。それは甚だ誤れる事でありませぬが、そ

の半面には教育勅語の解釋及び應用が誤つて居つて時代の進運に伴はない様な解釋と應用とに引つかつて居りはしないか。新たな誤れる思想に陥つて居るを呪ふのは無論不都合の事ではありますが、勅語の解釋應用を固陋にし狹隘にし、爲に我が文化の發展を阻碍する事が萬一ありましたならば、勅語に立籠つて文化の進運を妨げるやうな事が萬一ありましたならば、何として先帝に申譯をするのであるかと考へるのであります。この意味に於て私の卑見を忌憚なく申上げて、諸君の御批評を仰ぎたいと考へて居る次第であります、それに於ては三段に分つて議論を進めたいのであります。

二、教育勅語の解釋とその應用

第一は教育勅語の解釋とその應用であります、教育勅語の解釋に於て、狭い意義に見る者、廣い意義

必ずしも教育勅語と云はなくとも宜いのであります、若し強て言ふとするならば、教育といふ意味を餘程廣義に見なければならぬ、教化といふ程なる意味の教育でなければならぬ、學校の教育といふ様な事では無論ない、國民全體の、今の所謂社會教育でも、民衆教化でも、我國の文明を完成する所の國民全體の大理想でも、總て之を教育といふ言葉に於てお示しになつて居ると考へる、それは最後にお示しになつて居る「朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ成其徳ヲニセンコトヲ庶幾フ」と言はれた「威」といふのは國民全體であります、學校に於て學んで居る生徒ばかりではありませぬ。又「爾臣民」といふのは帝國の臣民全部であります、「又以テ爾祖先ノ」と言はれた「爾」といふのも國民全

に見る者の二つがあります、廣い意義に見る者の中にも顔る牽強附會の説を爲す者があります、廣いといふ事に依つて却て誤れる觀念を有つて居る者もあつて居ります。私は狭い考は無論いけないが、廣い考に就ても漫りに牽強を事としたり、或は杜撰なる解釋をするといふ様な事は、甚だ不謹慎且つ不都合の事であるかと考へるのであります。それは何を指すかと申しますれば、先づ狹義に解釋する者の誤に就て申しますれば、教育といふその「教育」といふ事柄であります、この勅語は一般に教育勅語と呼んで居りますけれども、何もさういふ表題を掲げてお示しになつて居るのではありませぬ、この中に「教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス」といふお言葉がある爲に教育勅語と呼び來つたのでありますけれども、それは「教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス」とお示しになつた計りではなくして、その他種々様々な意味合が現れて居りま

體てあります。それ故に教育といふ事は學校の教育も家庭の教育も含むのであり、又教育といふ言葉に囚はれる必要もない譯であつて、今の所謂民衆教化でも思想問題でも一切がこの勅語の御趣旨を大本とし、規範としてこれに依つて指導せらるべきであるかと考へます。

さうして之れを解釋する所の權能は、別段に教育家が専有すべき筈のものでもなく、文部省がその特權を持つて居る譯でもありません、吾々臣民に下し給ふたので、吾々臣民が誠意正心思を盡して聖旨のある所を奉戴すれば宜いので、官僚的にこの勅語は何といふ役人が解釋するのを以て正しいといふが如き、教權を賤與せられた事を知らないものである、今迄は教育勅語の解釋を、官僚的に或る者が定めたのが正しいものぢやといふ風に思ふ傾があつて、その甚しきは教育家の専有物かの如く考へて、これを

桶に取つて或る思想を排斥するやうな事が往々にあつた、殊に宗教に對する態度としては教育の勅語を能として種々なる事があつたやうに考へるのであり、それは誤つたこと、國民全體が誠意正心ある所を拜察してこれを遵奉すべきであつてこの勅語の解釋權が或る役人の手にあるとか、或る特別階級に屬すると思ふは不都合であらうと存じます。

又狹いといふ事に就て私は甚だ遺憾に考へるのは、それを學校教育の事のやうに思ひ成し、又學校教育に於ては、大體が唯物的の思想に傾いて居り、宗教を罵り佛教を侮辱するのは忍ぶべしとするも、學校教育が人間の本性を啓發する所の宗教的の氣分を侮蔑する時、倫理の根柢は其處に破壊されしなにか。或る識見ある外人が日本の國家主義、教育主義に對して警告を發した事がありますが、それは日

字を書いて送つて行くなどといふ虚偽の國民になつてはならぬ、軍人への勸諭にも「心誠ナラザレハ、如何ナル嘉言モ善行モ皆ウハベノ裝飾ニテ、何ノ用ニカハ立ツベキ」とお示しになつて居る、今のやうな精神では眞に強い軍隊が出来得るとは信ぜられませぬ、泣き／＼入營したやうな者を集めて、どうして強い軍隊が出来ますか、昔の武士が戰場に出るのに今日の入營者が納戸で泣いたやうな態度は棄にしたくもなかつたものであらうと考へる、私はそれが即ち唯物的の教育の弊害であると思ふ、今日世界の文化を毒して居るものは様々なる事柄となつて現れて居る、或は國際間の不和、權謀術數、或は階級間の衝突、或は個人の墮落、種々なる弊害を示して見ますけれども、これを原頭に上せて考へたならば、唯物思想の禍なりと斷定して誤りなき事でありませぬ。この總ての禍を生み出したる唯物觀念を我が

本に於ては國家主義を力説するけれども、思想の根柢に唯物主義を奉じて居るが爲に、唯物的の思想に陥る時必ずや利己心に流れて犠牲の精神を失ふ、唯物的であつたならば「義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも輕し」といふ道念は消へ去るであらう、唯物的の思想は自分の身體が生きて居つて始めて意義を持つのであつて、自己の生命を鴻毛の輕さに比しては唯物主義は成立たぬ。それ故に唯物主義を鼓吹する結果は、國家とか國民とか言ひながらそれが形式化して、忠君愛國を口にしながら徴兵に當つては、多くは泣面をして、表面には大きな旗を立て、「飛んだ事營」と書いて騒いでも裏の方では泣いて「飛んだ事になつた」といふやうな虚偽な國民を造る事に成るのであります、それ程嫌ならば「嫌だ／＼」と言つて泣きながら道を歩いて行つたら宜いではないか、納戸では泣いて居つて、外へ出ては大きな「祝」といふ

教育界に於て守持し、今尚ほ覺めたるが如く覺めざるが如く、その多數者は今も尚ほ唯物主義のやうに見受けらるゝのであります。幾かに敬神崇祖の訓令を發しても、それはやはり形式的のものであつて、大多數の教育家の頭を支配して居るのは唯物主義でありますれば、聖旨に背く事大なりと申したいのであります、後にその譯柄は申上げます。

又この勅語は國民道德の綱領大體をお示しになつたものであります、併し國民道德といふ事を今迄教育界に於てはどう解釋して居りますか。國民道德とは特殊道德であると前提して、我國の歴史に於て特別に發達したる特別な道德と解して居る、特別といふ事も結構であるけれども、人として人類共通なる道德、世界人類の一員として當然守るべき道德、天地人三才の中の天地を戴いて立つ人としての道德總てを忘れ去つて唯だ我國の歴史に發達したる忠孝

道徳に於てのみ説明することになつては居らぬか。私は我國の國民道徳といふ意義を左様な偏つた意味をすることは非常な間違ひであると考へる、道徳に一般的の方面と、特殊の歴史的の方面とがさびれすけれども、この兩方を併せ爲して始めて我が國民の道徳であると考へる。然るに或る時代の文部大臣が地方官に對して訓示した時、宗教は人を造るものである、人間としての心得を教ふるものである、教育は國民を造るものである、そこに違ひがあるといふ事を申しました、是等が吾輩よりして言へば教育界の誤謬を遺憾なく言ひ現して居るものであると考へる。教育と雖も國民を造ると同時に人たるの光を現すべく導かなければならぬので、國民としては完全であつても人としては不具であるといふ様な者をつつては不都合である、宗教も亦人を造ると同時に國民を造るべきであつて、人としては立派な

やけれども、國民としては故障を生ずるといふ様な宗教の感化は誤つたる事でありませう。さういふ愚論が一國の大臣から地方官に向つて訓示される様であつたからそれから以下に働く學校の先生達はやはりそれと同じく、若しくはそれに足をかけた様な思想があると認めても差支ないと思ふ。それではうまく行きますまい、その弊が今日に現れて來て居るのはあるまいか、近頃思想界を見ても「人間として」といふ方を論ずれば國民の道徳を嘲ける様な事になり、又國民道徳を語る者は人間としての美點を説く者を危険思想の中に打込む様な事になつて居る。それ故に此頃の新聞を見ても「人間」といふ雑誌が出來て、その方は矯激な思想を書いて居る、人間と言へば國を忘れる様な事になり、國民と言へば人間としては通用せぬといふ様な事になつて居る、妙な事が流行して來たものであります。これは容易ならぬ誤

解であります。一人一個の學者の誤解ではなくして、我國文教の方針が左様な愚劣な態度であつては先帝の聖旨に背く事大なるのみならず、國家の前途を危うするものであります、今にして覺めなかつたならば禍ひは蕭牆の間より起つて、遂に日本の進運を阻碍するに至ることは火を睹るよりも明かでありませう。即ち「人間」といふ雜誌に色々の事を書いて居る如きは、それは彼等が誤つて居るのであるけれども、一方に國民を特殊の型に入れた偏固なものに考へて行き居るから、それでは満足は出來ない、吾々は人間であるといふ自覺に依つてこれと戦ふ事にして完全なる教養を與ふるのみならず、人としても亦完全なる教養をお示しになつて居る事が、その文意に在りて明々白々であると信ずるのである、それ故に歴史的に發達したる特殊の道徳と、人

類一般の運率すべき普遍的共通的の美點とを併せ成して、これを國民道徳と申したのであります。尙ほこの勅語の解釋に於て、これは全然宗教を認めないものだとして解釋する事でありませう。無論この勅語に於ては何れの宗教を信ぜよといふ事もありませぬ、又何れの宗教を退けよといふ事もありませぬが、この全體の聖旨のある所を窺ひ、且つ又一つの勅語を解釋するに方つては他の陛下の御詔勅御製我が過去の文化、皇祖皇宗の遺訓、之れ等を併せ見てこの勅語の聖旨を正解するは當然の事であらうと存じます。文章簡であるからその意味の鮮明を缺く事のあるのは已むを得ないのである、その場合に此れに現れて居ないものは皆用ゐないとするならば、非常に日本の文化を滅殺する事に相成るのである、勅語の文字に現れざる事は皆捨てゝも宜いものぢやと考へて居る人もあるのであります。さうしてこれには

宗教を信ぜよと明言せられた事がない、だから宗教はいらぬといふ様な観念を持つて居る、それはその淵源する所古いのでありまして、歴代の文部大臣

として、この勅語と宗教との關係を如何にかといふ大事な問題に就て、明確になつて居りませぬ、それ故に宗教に對しては教育者の態度は實に不鮮明で、寧ろ宗教を拒斥するとか輕蔑するといふ態度であるかと思ふ、今は輕蔑といふ言葉を嫌つて、さういふ事は無いと言ひ譯をして居る、けれども宗教と教育との關係は如何にあるべきかとの鮮明なる意識を有つて居る者は極めて少いのである、それは言譯としてさう言うて置が、腹の中は無宗教の者が大多數を占めて居るのである。若くは宗教を邪魔にする位の考へを有つて居る。それとはなしに佛様ナンといふものは昔言つたものであるとか、死んだ者に魂があるナンといふ事は迷信だとか、地獄、

ありませぬ」といふ人が澤山ある。言譯は兎も角も、眞實を申せば——若くは檢事の論告の態度を以て申せば、教育界に於ては宗教の發展を阻碍し、我が國民より宗教心の啓發を阻止したる罪は、どうしても有罪の宣告を與へなければならぬのであります。そこて是は斷然悔改めねばならぬ態度であります。

但し斯様な事を聞いて居りますが、この點も餘程明瞭にしなければならぬ事である。それは、宗教全部が悪いといふ考へはないが、基督教が日本に蔓延すると我が國民道徳を傷つける、彼は西洋的思想の爲に個人主義を力説したり、或は共和政治の觀念をいふたり、又基督教の神を説くが爲に日本の神明を同じしめたり、我國の長所を理解せずして何となしに歐化思想に導く事に依つて、この日本の教育を阻碍するからして、そこで宗教はいけぬといふ事にして、之は拒斥しない限りには、我が教育の効果

極樂ナンてそんな事はない、釘抜きて舌を抜くナンといふ事はありはしないとかいふ様な譯で、所謂科學の知識の下に落込んで、深淵なる宗教の意識を理解せざる教育者が、つい宗教を侮蔑せしむる様な事を言ふのである。それで宗教家に對して使ふ言葉なども頗る不遜な事をいふのである、楠正成公に對しては「楠公」というて尊敬するやうに言ふ、發音からさうである、楠公様と言ひ、乃木將軍様といふ。坊さんの事になつたならば、日蓮といつても侮蔑した様な意味を含んで、「日蓮坊主が……」といふ様な口吻でいふ、日蓮が如何なる忠君の志士であつたかも知らないで、徒らに宗教を厭嫌せしむる様な事を言ふ、吾々は屢々耳にする「私は家庭にある時は宗教の信仰を有つて居つたけれども、學校の寄宿舎に入り、學校の教場て教はりつゝある間に、家庭で與へられた信仰を失つてしまひました、今は無宗教で

を擧げる事が出来ない、即ち我が倫理政策の爲に、宗教とし云へば善きも惡きも嫌がらすやうにして置くことに依つて、これを防禦したものである、我が國民教育の倫理政策より出たものであると。斯ういふ事を相當なる責任者より私は耳にしたのであります。その御苦心の點は御尤であります、それは基督教が我が國民道徳を阻碍する事のあるのも私は同感であります。併ながらそれは「基督教には斯ういふ點があるからいけない」と申したら宜いのである、基督教が悪いからそれを怖つて、一般に宗教といふ名で拒斥するといふやうな男らしくない態度を、何故お執りになるのでありますか。基督教には斯ういふ氣分があつて教育と調和せぬが、佛敎は東洋の文明の内に産出したるが故に、同じ宗教と雖も國民道徳を涵養する上に多大なる效力がある、基督教の方は注意警戒をしない限りに於ては過ちがあるとい

ふ事を明かにして、教育者を指導なさらないのでありませうか。私は何處の國でも左様にして文教は布いて居ると思ふのである。自國の歴史的に發達したある宗教までも、他國の宗教を拒斥するが爲

に一緒にごま化して打込んでこれを拒斥するといふやうな虚偽なる政策を執る國家はなからうと考へます。私は基督教は今後に於ても國民道德と調節を圖るべく、一段の覺醒を要する事と存じますが、それは基督教だけの問題であります。教育界に於ては基督教の缺點も、佛教の長所も、若くは佛教の缺點も、皆明かにしたら宜いのである。佛教にも厭世

悲觀の所があつて教育と合致せなければ、例へば淨土宗や眞宗のやうな宗旨は教育上有害なりと、教育者に教へたら宜いのであります。この大事な思想の問題をお座成的や、ごま化しや、好い加減な考てやつて置いて、思想の論争が枝々相摩するの秋に於て

も恐るべき原頭は、國民が高潔なる宗教心を失ふ事に淵源するのであるとは、これは世界の定論である色々この禍ひの來る所はありますけれども、人々が唯物的思想になつて高い理想を失ふのが本である、その高い理想に導くものは宗教である、道德が形式化して根柢を失ふ時、その道德の根柢を築くものは宗教である。道德が實行の力を喪ひ、言葉では覺えるけれども實行し得ない時、その道德の實行力を與ふるものは宗教であります。物質我慾の爲に人が過ちを取る時、これを牽制しこれを反省せしむるものは宗教である。すべて今日の弊害は、宗教の神の意義を發揮しさへすれば、大部分除かれるのである。然るに今尙ほ醒めずして、教育者が宗教に就て正確なる觀念を打樹てざるは、國家の前途を念はぬ者と言はれても申譯がありますまい。唯だ一時を糊塗して今までやり來つた間違ひを正直に謝罪する

左様な態度を以て民心が繋げるとお考へになつて居るのであります。モツと正直に、善いものは善い、悪いものは悪いといふ事を先覺者が示して、さうして後進者を指導すべきではなからうか、私は今までのやうな左様な虚偽なる倫理政策を執ることは國家に大害を與ふるものであると信じます。

左様にして宗教の必要を感じ、さうして「國民道德と最も能く調和し、これを助成し、若くは協力一致して進む様な宗教があるならば……」といふ事が何故お考に浮ばぬのでありますか、國を思ふ志が足らざる爲めでありませうか、罪深くしてこの高潔なる信仰を理解する事が出來ぬのでありますか、何の爲に教育に従事し、何の爲に思想界の事にお働さになるのでありますか、一時をごま化してそれで濟んだら宜いといふのでありますか、國家の前途を思はぬのでありますか。今の思想界が惑亂するに就ての最

だけの勇氣が無い爲に、この點を明かにすることが出來ないのではなからうか。この狭い解釋に就ては色々ありますけれども、左様な事のみ申して居つては時間が無くなりませうから姑くこの邊で預りにして、次に廣い解釋に就ての缺點を申し上げたいと思ふ。それは宗教の必要を自覺して參つたが爲に、この教育勸語の中に宗教があるといふ事を申すのであります。無論宗教の或る意味合はありませうけれども、これに依つて教育勸語は直ちに宗教を信ぜよと示しになつて居るといふのは、どの文意から申すのでありますか。教育勸語をば牽強附會する事は、畏れ多いことである。丁度法華宗の或る者が經文を離れて、文の底ぢやといふ様な事を言つて横へ抜け勝手な事を言ふやうに、教育勸語の意味ぢやと言つて杜撰なる考を混せて行くのは、甚だ相濟まぬ

事でありませぬ。この勸諭の中に宗教を含むとすれば、
 どういふ意味の所に含有するかを明かにしなければ
 なりませぬ。モウ一つの説としては、この教育勸諭
 のものが直ちに宗教であると言ふ人がある、勸諭
 宗教だと申して他の宗教は要らないと云ひ、
 佛教でも他の宗教でも排斥するのであります。それ
 は物の観やうでありますから、これが宗教だと言つ
 ても一概に悪くもありませんが、併し宗教には定義
 もあれば宗教の本質がある。宗教は永遠の生命を認
 め、さうして宇宙絶対の神なり佛なりを認めて、兩
 者の結びつきに依つて一切の教行が導かれるので、
 信仰を本にして居るものである。さうして見ると、
 この勸諭に依つて、吾等生命の前途が如何に導かる
 べきものか、宗教の實在の觀念、感應の觀念といふ
 様な事柄は如何に導かるべきものかといふことは、
 この勸諭を以て説明することは出来ないのである。

そこで勸諭道といひ、勸諭宗といふことを言ふ者
 は、これは亦餘りに教育勸諭の趣旨を濫用するもの
 であると私は考へる。我國の文化は勸諭を大本と
 して大切な綱格は示しになつて居るけれども、併
 し教育勸諭に示しなさらなくて、御製なり他の詔
 勅に示しになつて居る事も多々あるので、若し一
 切眞端教育勸諭で事が足りて居るならば、軍人の勸
 諭も要らない、戊申詔書も要らない、醫療救恤の詔
 も要らない、多くの御製も要らない、教育勸諭のみ
 あれば宜いといふ事になる。併し此の勸諭は大切に
 は違ひないけれども、簡單なる御文章でその意味を
 明かに示しにならぬ點もあるのである。それは他
 に示されたる聖旨を遵奉致して、さうしてこの教
 育勸諭の聖旨を直接間接に助け成して、この御趣意
 が成べく廣い意味に於て、過ちなき意味に於て普及
 徹底するやうに、正當なる解釋をして行かなければ

ならぬと思ふのであります。前には固陋なる狹隘な
 る解釋をして、少々具合が悪くなつて來れば、この
 中に宗教があると言つて他の宗教を排斥するといふ
 様な、さういふ陋劣なる態度は宜しくないと思ふ、
 是は餘程重大なる事でありまして、教育勸諭が宗教
 だと言ふ時、日本の國家を危くする災が其處に包蔵
 さるると思ふ、所謂皇室を以て宗教の中心とする時
 には、他の宗教が起つて参りますと、遂にその國家
 を滅亡に導く、羅馬が亡びたのはそれが爲てありま
 す。露西亞が亡びたのもそれが爲てあります。皇室
 を以て直に宗教とする時、それと相異なる主義主張は
 その國家を咄ふに至る、皇帝宗教は非常に恐るべき
 同、あり、教育勸諭を以て宗教なりとして他の宗
 教を排斥するが如きは、過激思想に誘はぬ危険を伴
 ふのであります。我が皇室は左様な事よりは超越遊
 ばされて、左様な論争に關らずして、凡てのものを

率ひてお出でなさるのである、故に勸諭を直ちに宗
 教とする解釋も、私は採るべきでないと思ふ。
 然らば正しい解釋はどうかといふ事に就て、卑見
 を申上げて見たいのであるが、その前に一言應用に
 就て申して置きたい。解釋既に誤れるが故に従つて
 應用が誤るのは當然であります、それは一々申す迄
 もありません、又餘り事實に就て今日迄の事を申上
 ぐれば、却て恐入るやうな事になるのでありますか
 ら、私は申しませぬが、この勸諭出でしが爲に日本
 の國民の宗教心の發達に如何なる關係を取つたかと
 いふ事を、應用の上、又文部省が爲さつて來て居る今
 日迄の事からして考へましたならば、餘程大きな問
 題がそこにあらうと考へます。けれどもそれは餘り
 多くを申上げたくありません、唯だ解釋既に誤れば
 應用に於ても十全ならずといふ事は、モウ論理の明
 かなる所であり、多言を要せぬ事でありませぬ。(未完)

本經祖書要文講義

本 多 日 生

「警諭品」 具さに諸子に告ぐ、汝等速に出てよと、父憐愍して善言をもつて誘諭すと雖も、而も諸子等嬉戯に樂著して肯て信受せず、驚かず畏れず、了に出づる心無し、亦た復た何者か是れ火、何者か是れ舍、云何なるか爲れ失なるを知らず、但東西に走り戯れて父を視て而して已みぬ。

「警諭品」の文は彼の三界火宅の譬の所であつて、父が子供に話をして居る一節であります。父が他所から歸つて見ると、子供が火事の様子居る舎の中を

遊んで居る、そこで具さに諸の子供に告げて、汝等速にその舎を出るが宜いと言つた。父は火事に燒殺される事があつてはならぬと思つて、子供を怒れんていろ、優しい言葉、善い言葉を以つて誘つて早く出よ、といふけれども、諸の子供は遊びに氣を取られ、或は玩具に心を引かれて、父の言葉を眞に受けて出て來ない、火事が行き居ると言つても、火が床の下に廻つて居ると言つても、少しも驚きもせず、畏れもせず、了にその舎を出やうとする心が無い、嘗にその舎を出る心が無いばかりでなくして火が廻つて居ると言はれても、その火といふものはどういふものかを指して言ふのやら、舎といふのは何

を指すのやら、そこにいろ／＼失があつて恐ろしい所ぢやといふが、何が恐ろしいのかといふ事を知らない、唯だあらちらに走り戯れて、ちよつと父さんの顔は視たけれども、やはり遊びの方に氣を取られて、直ぐに又駆け出して行つて戯れて居つた。

これは未だ目覺めざる有様であるけれども、心ある者はこの經文を見て覺めなければならぬことが分る。即ちその「火」といふのは人生の缺陷を指して居るので、四苦八苦と稱して、或は病に罹り、年を老り、死ぬるといふやうな八つの苦みがあつて、或は可愛い子供が死んだとか、女房が死んだとかいふ事、な事に依つて、心に種々なる苦痛を感ずる。

それは身分の如何を問はない。却つて幸福な地位に置かれた者の方が、妻子の別れといふやうな事に就ては深く苦痛を感ずるのである、それが即ち火である。「舎」といふはこの人生を指して居る、この人生

は、今の文明では現在に餘りに重きを置いて、現實主義も善かつたけれども、無暗に現實ばかりを見て永遠の世界を考へないから、生れてから死ぬまで勝手な生活をしやうと考へて居る。近代の思想は洵にその點は淺薄なもので、或る新しがりの人が法華經を讀んで言ふのに、法華經の中に「身命を惜まざして唯だ無上道を惜む」といふ言葉があるが、斯ういふ馬鹿げたことを言ふからいけない、身命が無上道ぢやないか、命以上に何があるか、命を捨て、しま

へばカラツボぢやないか、だから今迄の宗教とか、道徳とかいふやうなものは取るに足らぬものだ、そんなものは捨て、命を無上道として大切にすることがよい、といふやうな事を言つて居りますが、それは實に露骨に彼等の思想を言ひ現して居る、それが近代文明の特色ナシである。この舎に餘りに執はれて居るが故に、火事の行き居る舎より外に出やうと

いふやうな考が少しも起らない、所謂驚かず、畏れず、了に舍を出づるの心といふものが無い。人生の爲に努力するといふことは宜いけれども、これを以て満足の境界とし、命が無くなる位なら何も要らぬ。ふ事になれば、そこに高潔なる犠牲の道徳、生を捨て、義を取るとか、身命を捨て、道に盡すとかいふやうな道徳は全滅されて、皆自分の利益の爲にのみ動くことになる。儒教の方でもその事は一番に戒むべき事に言うて居る、即ち「君子はその賢を賢とし、小人はその樂みを樂みとす」といふことがあり、君子といふ者は、偉い人の教を受つてこれを守つて行くのを一番有難い事に考へて居る、小人といふ者は自分の享樂的な事に囚はれて、それより上は無いと思つて居る。卑しき樂みを樂みとして追求して行く者が小人である、賢を賢としてその教から自分の行動を導かうとするのが君子である。

その事を考へなければならぬ。茲に子供の玩具といふのは、人間の肉慾を指して居るのである、今日の所謂自然主義のやうな思想である。破壊主義者は盛んにこの肉慾を煽るのである、命を惜んでさうして肉慾に耽溺するのを以てそれを文明と考へて居る。故にこの舍を出づる考がない、又そこに如何なる失があるかといふ事を知らない、その失といふものは人間は左様な肉慾を煽ることに依つて、貪慾、瞋恚、愚癡、また怨恨、憎惡、或は殘害するといふやうなことが起つて来る、その甚しきは今日の文明に現れて、國と國との間には種々なる口實を設けて侵略をや、國民相互の間には階級の闘ひを開き、誠に恐ろしき世の中になつて、この前途はどうなるか殆んど安心の出来ないやうな危機に瀕して來たといふものは、即ち左様な失が起ることを知らないからである、唯だ現實を現實にのみ思つて行つたならば、人

間の煩惱のみが、盛んになつて、遂に互に相殺害するに至る。その失のあることを知らないから、斯の如く戯れて居つて、宗教の信仰に入ること知らないのてである。

れに酔つぱらつて、身命が無上道ぢやとか、この現在生活が全部ぢやといふ様に考へて居る思想は、極めて暗愚な思想であつて、遂にその失の現れる所、相殘賊するに至るものである。それだけの事をも知らないで、政治家とか文教の府に立つ者が文明を裁いて行くとしたならば、健全も不健全もない、皆暗愚な者であるから、寄つて媚つてこの文明を壞す事になる。今の世の中が壞れつゝあるといふのは、

法華經は一乘の教であつて、世間と佛法と融合し又世間相常住とまで説いて、決して人生を悲觀したり、消極的に考へて居るものではない、併し人生の缺陷といふものは能く見て、さうしてそこに一貫したる信仰を打立て、この人生を完全に導かうとする高潔なる道徳的の運動となつて起つて來るのである。道徳を無視したり、宗教を無視したりして、酔つぱらつて暮して行く跳上りの現實主義とは違ふ。司馬の缺陷を見て悲觀的に退嬰的に、驚いて逃げ出さうといふ遁世主義は宜しくないけれども、人生の缺陷を見て、それを救ふべき努力となつて現れて來るのは大切な事である。人生の缺陷を見ないでそ

必しも危険主義者のみが壞すのではない、敵も味方も皆寄つて低級なる文明に墮落し、この所謂驚かず、畏れず、醒あざる者が相寄つて人生を誤るが故に斯様な事になつたのである。その中に温和な者と狂暴な者とはあるけれども、大體根本觀念に於て人生を觀察する點に於て、所謂人生觀の根本に於て大誤謬を有つて居るが故に、間違つた者同志が寄つて居るから、斯の如き激しい禍ひになつて來たの

である。これは唯だ過激派のみが悪いのではない、健全派といふ者が、思想の根柢に於ては大誤解を有つて居るが故に、寄つて媚つて斯の如き文明を作り出したものであらうと思ふ。それが爲に古來皆憂へて居る、即ち聖人が前に言ふ通り、賢を賢として教から導いて行かなければならぬ、唯だ樂みを樂とし、利を利とし、上下交々利を射て國殆しといふやうな、斯の如き利慾を増進せしめて、そこに文明が進むと思つた左様な經濟學とか政治學は根本總論に誤りがある。どうしても人間は手綱を引締めて行かない限りには、斯の如き過ちを取るものであらうと思ふ。それを人間のさういふ慾望を節制して行く教訓を、一概に消極的であると考へて、無暗に自己の權利、利益を露骨に主張することが新しい文明のやうに思ひ成したことが、今日の禍ひを來した所以であらうと思ふ。文明を改造するといふならば、こ

の今日の全部を改造しなければならぬ、今日言うて居るやうな改造ナンといふ事は、改造でなくして寧ろ破壊を手傳つて居るやうな話で、唯だ人間の僅かな權利を主張するとか、デモクラシーの思想が普及さへすれば、それで世の中が改造されると思つて居るが、今日は最早や少数者の政治上の壓迫とか、多數の意思を伸るといふ其間ひではないのである。多數の意思を述べさせても破壊をする、さうして少数者に委せても私をするのであるから、少數、多數といふ事ではない、全體を擧げてもつと賢を賢として、教に歸る事に目覺めない限りには駄目である、少數、多數といふやうな形式論ではない。假令少數者が權利を拋棄して多數者に渡しても、多數者がやはり同じ事を行つて世を殘害するのである。簡単に言へば道德宗教のやうな、人間を指導すべき修養の本を捨て、居るのであるから、どうしてもうまく行

く譯がない、そこに目醒めたる者は宗教に來る譯である。故に過激派と健全派の直接の闘ひは、宗教を挾んで闘つて居る、それが分らないで、法律の——治安警察法の十七條がどうかやとかいふやうな闘ひ、あゝいふものは一つ通れば又一つ、ナンボでも問題は起る、彼等は喧嘩をしやうといふのが目的で、何處までも衝突點を尋ねて居るのであるから、そんなものを改正したからと言つて彼等が穩かになるものでない、一を得れば又二、又三といふやうに、ナンボでもやつて來て、遂に奪はずんば飽かずである。まるつきり奪ひ取つてしまつても尙ほ殘害を撞にす上、さういふ事ではどうしても本へ歸つて、道德宗教の力を發揮するやうに文明を變へなければ駄目ぢや要するに法制經濟が勢力を得過ぎて、道德宗教が輕ぜられた結果、此に至つたと言つて宜いのである。

今でも未だそれが分らないで、法制經濟を重んじて居る、尤も道德宗教を口では少しは言つて居る、思想が重いといふやうな事は言つて居るが、それが爲めに努力する者は洵に少ない。法律の一箇條でもあらうものなれば、中々重い事にして騒いで居るが、教の方の大きな事柄が破壊されても何とも思つて居りはせぬ。さういふ政治をやつて居るから文明が斯の如き破綻を來したのである。

二、壽量品 使を遣して還つて告ぐ。
 汝が父已に死しぬと、是の時に諸の子
 父背喪せりと聞いて、心大に憂惱して
 而して是の念を作く、若し父在しなば
 我等を慈愍して救護せられまし、今は
 我を捨て、遠く他國に喪したまいぬ、
 自ら惟みれば孤露にして復た恃怙な

し、常に悲感を懐いて心遂に醒悟し、乃ち此の薬の色香味美きことを知つて、即ち取つて之を服するに毒の病皆えたり。

次の「壽量品」は、前にいふ通り超人者たる本佛を渴仰して、覺醒めたる精神——前のは人生觀の缺陷に覺醒めよといふ事を言つたが、今度はこの果敢なき人生に落つて考へて行くといふと、洵に有難い佛様が御居てになつて、吾々を守つて御居てになる、恰度子供は捨てられた孤兒でなくして、慈愛深く且つ賢明なる父を有つて居る子供である、その父の導きに依り、守護に依つてさへ行けば、安全なる状態に置かれるものだといふ事に覺醒するのであります。これは最初の子供等がその事に覺醒めないが故に、壽量品の譬も父が方便を設けて、使を遣はし

て子供に告げて言ふには「汝が父は既に死なれた、浮か／＼して居つては誰も助けて呉れる者が無いぞ」といふ驚きを與へられたが爲に、この時に諸の子供は、お父さんは最早やあ表れになつたと聞いて、これは浮か／＼して居つては誰も守つて呉れぬといふ、そこに驚きを懐いて、さうして父が御居てになつたならば、吾等を懲れんでお助け下さるのだけれども、父はもう吾等を捨て、遠く他國にお表れになつた、自分の身の上を考へて見ると、孤兒で誰も頼りにする者も無いといふ風に考へて、非常に悲んで居つたが、その悲みの爲に今までの毒に中てられて居つた心が静まつて、さうして前の迷つたやうな有様であつたのが醒めて来て、父が残して置いて呉れた薬、その薬の色と香と味の美きことを知つて、即ちその薬を取り出してこれを服んだ所が、毒の病は悉く癒へた。

これは子といふのは吾等衆生である、父は本佛釋尊である、他國に死んだといふのは方便を以て涅槃を示されたのである、使を遣はすといふのは佛弟子をお遣はしになる事で、日蓮聖人の如きは即ちその使である、さうして覺醒めるといふ事は、吾々が日蓮聖人の使の言葉に依つて宗教心がそこに湧いて、所謂絶対の人格者を渴仰する所の氣分になつて、「父在せしかば」といふ、父を顧みて渴仰する精神になつて来る。それから父の遺して置かれた教、即ち一切經、その一切經の中に殊に法華經がある、その中には一切のものが能く揃つて居る、色と香と味——これは昔の言葉では戒定慧の三學と謂つて居る、今上までば眞善美と言つても宜しい、眞理も善徳もそれから、審美の方面もある、吾々の智慧の目的である眞理も、意思の目的である道徳も、感情の目的である美の快感といふものも、この三つのものが揃つ

て居る、三つといふけれども一切である、さういふ非常に完全な教がある。他の教は到底さう行きはせぬ、哲學的に考へれば根據が無いとか、道徳的に考へれば道徳の意味が缺けて居る、然るに哲學的、道徳的、美術的の人間のあらゆる思想を満足せしむべきものが佛教には完備して居る、殊に能く法華經はそれを纏めて居る、阿彌陀經などになると假に美の方面があるとしても、眞理の方面とか、道徳の方面とかいふものが缺けて来る、楞伽經あたりが假に與へて眞理があるとしても、温か味といふものは無くなつて来る、さういふ偏つた教ではいけない。法華經はすべて完備して居る、宗教といふものは寄せ集めてはいけない、隣の物を借りて來るといふ事はいけない、自分の教の一つが完備して居らなければならぬ、寄せ集めて間に合はずといふやうな譯のものではない女房でも亭主でもさうである、澤山寄せて漸

く一人前になつたといふやうな者はいけない、女房一人の上で人格が善くなければならぬ、夫一人で善くしなければならぬ、君主でもその通り、三人も寄せては君主を考へるといふやうなことはない。その通りに宗教といふものは寄せ合せて間に合すといふものではない、その教一つが完全になければならぬ、他のものと融合を取るとか、取らぬとかいふ事はその方法に依つての話であるが、寄せ集めといふやうなもので、道具でも借りて来たやうに、茶碗は自分の物、お椀は隣の物……さういふ譯のものではない、一つが完全にしなければならぬ。さういふ風に絶対の本佛と完全なる、教義に覺醒めて、さうして信仰に達すべしとの教示が、この教文の趣意であります。



教義

日蓮聖人教義綱要「第四十三回」

井村 日 威

第十章 本門の題目

第一節 一言の妙旨

以上第七、八、九章に亘つてお祈をした發心、修行、得益の三は日蓮主義の觀門、即ち實行部面に於ける三階段であつて、實行に入るの始が發心であり、其中途が修行であり、其終が得益である、此觀門の全體を一言で言ひ顯したのが南無妙法蓮華經である、聖人が處々の御文中に南無妙法蓮華經と上經とと言ひ、妙法を信ぜよと言はれたのは此意味から仰司られたので、但口先で南無妙法蓮華經と普音的に轉ぶる計りが能ではない、此簡單な一言の妙法の中に深重なる意味を含んで居る處が大切な事柄である、此事を能く理解せずしては日蓮主義の眞實は分らないのである、日蓮聖人立正觀抄の中に、天台大師御自筆の灌頂玄旨の血脈を引て、

大僧正本多日生猊下講演 日蓮聖人降誕七百年

統一臨時増刊報 第七百周年纪念號
大正十年二月十日發行

目次

- 一、降誕の因縁
 - イ、如來の化導を助けんが爲め……ロ、我國の文化を大成せんが爲め
- 二、教化の中心
 - イ、法華經の教義……ロ、我國文化の正統
- 三、門下の覺醒
 - イ、數字局量……ロ、教義の紛亂……ハ、信仰の低劣
- 四、門下の事業
 - イ、信仰覺醒の運動……ロ、思想善導の運動……ハ、相互の聯絡運動……ニ、紀念事業 (出版、建築、其他)
- 五、統一團の覺悟
 - イ、已上
- 定價、一部金拾錢、郵税金五厘。百部以上二割引。施本傳導に御使用の方に對しては拾萬部を限り定價半減一部金五錢の割にて頒與す。

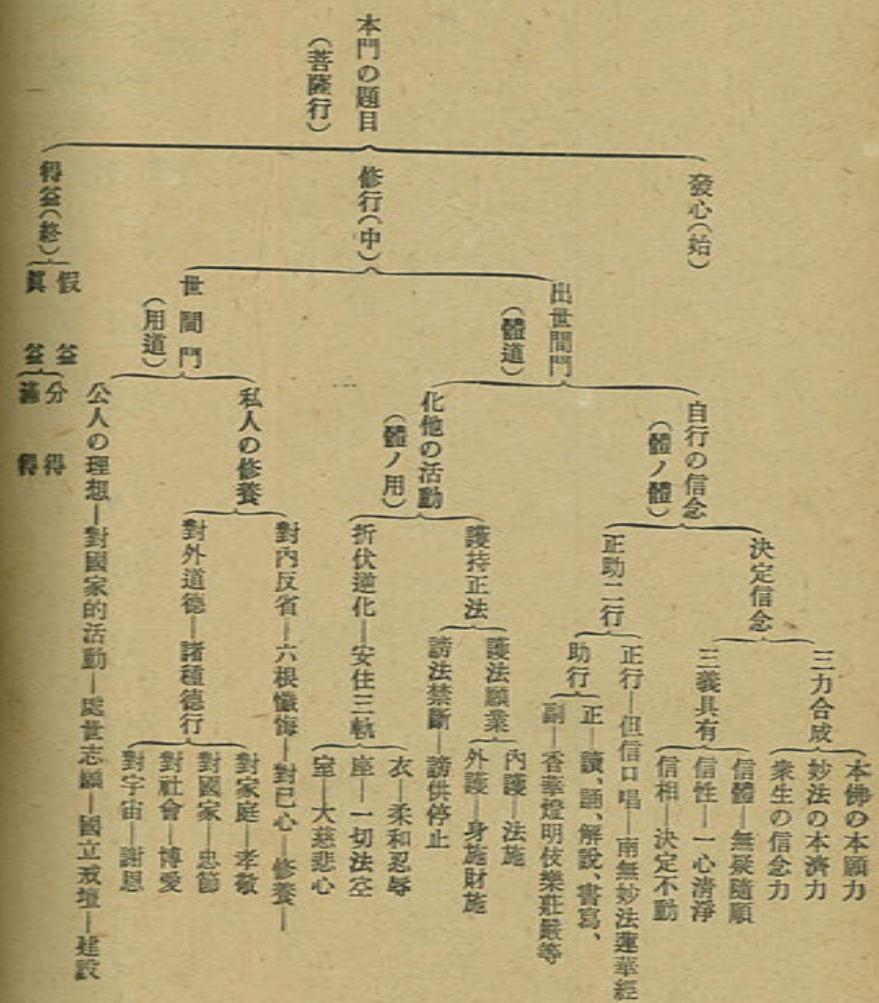
此書に云く一言の妙旨一教の玄義と

更に傳教大師の血脈を擧げて、

夫一言の妙法とは、兩眼を閉じて五塵の境を見る時は隨緣眞如なるべし、兩眼を開いて無念に住する時は不變眞如なるべし、故に此一言を聞くに萬法茲に達し一代の修多羅一言に含す。(續遺一〇七〇)

と、一言の妙旨とは即ち妙法の一音である、南無妙法蓮華經の一言は甚だ簡單なれども、其内容は萬法茲に達し、一代の修多羅を一言に含んで居るのであるから、其意義の甚だ廣きものであることを認めねばならぬ、此一言の妙旨を日蓮聖人の教義の三大秘法の隨一たる本門の題目と言ふのである、通俗に本門の題目と言へば、但御題目を唱ふること文であると思ふて居るのは、日蓮主義を本當に知らぬ人の言ふことである、本門の題目とは實行部面の全體を總稱しての呼稱である、此を圖示すると左の如くなるのである、

日蓮主義の觀門の總括圖表



此圖表の概に發が面が調整せられて、修行に凝れて行く處に、日蓮主義の眞實なる活動が顯れるのである。此各方面が調整せらるゝと云ふことが一番大事な事である。人は各々好む處があるから、其好む處に偏するものであるが、それは完全な人格を得ることは出来ない、完全な人格を顯す人は一面に囚はれない無我の人でなければならぬ、佛陀がそれである。此は六ヶ點が、そうでなければならぬ、現に今の日蓮主義者の様に或者は經文の空論に取り、或ものは道徳を忘れて信仰を主張する、又苦行と云ふ言葉に囚はれて、上求者技の信念を欠けるものもある、此等は作れも其一部分に囚はれ、吾輩を會せざるより走つたもので、眞の日蓮主義者と云ふことは出来ない、佛陀日蓮主義者である、圖表に示した様に各方面に亘つて整ふた修行を爲すと云ふことは餘程慎重なる態度を以て、其實行に拘はねばならぬことで、一寸の出来心の信心や、一二回の誦經に是居した位では其要領を得る上程は出来ない、充分の信仰と努力との結晶でなければ出来ぬことである。そうかと云ふて此は決して六ヶ點專科ではない、正しき信仰に安住し得るならば、行くとして可ならざるは無く、何れの方面に凝ふても其光を發して來るのである、日蓮聖人四條金吾に論し給はく、

人身は受け難し、爪の上の土、人身は持ち難し、草の上の露、百二十まで持ちて、名をくだして死せんよりは、生きて一日なりとも名を擧げん事こそ大切なれ、中務三郎左衛門尉は、主の御爲にも、佛法の御爲にも、世間の心根も吉かりけり吉かりけりと、鎌倉の人々の口にうたはれ給へ。(編遺一六四五)

と、此文の中に、佛法の御爲にもとは、出世門に於ける、自行の信念と化他の活動である、主の御爲にも世間の心根もとは、世間門に於ける自己の反省と對他道徳の方面に於ける修養徳行を擧げられたのである、斯く各方面に調整せられたる信仰こそ眞實の法華經の行者なるものである、聖人更に四條金吾に示して

強盛の大信力をいだし、法華宗の四條金吾四條金吾と鎌倉中の上下萬人乃至日本國の一切衆生の口にうたはれ給へ。(編遺八五四)

と、法華宗の四條金吾は各方面に完全なる人格を示して、日本全國の模範人格者たるべきことを御せられたのである、法華經を信するものは、此覺悟を以つて進退せねばならぬ、法華經信者日蓮主義者なるものは模範人格者たる自覺と信心を有するものでなければならぬと云ふことをお示しに相成つ

たものである、今の自稱日蓮主義者たるもの、大反省を要する點であらうと思ふ。今年日蓮聖人降誕七百年の佳辰に際し、但徒らに祭騒に没頭して、聖人教義の何たるやを理解せず、迷信雜信を鼓吹して、世を毒し人を誤るもの、聖人の遺教を濫用するに至つては、只首悔嘆の外なき次第である、我等は日蓮聖人御門下の名を冒しつゝ、世を毒し人を害ふ徒輩を先づ第一に責めねばならぬことと思ふ。降誕七百年記念事業の第一に數へらるべきは、此等似非日蓮主義者の化の皮を引剥くべき事であらうと思ふ、お話は餘談に亙つたが、要するに日蓮主義の觀門は本佛釋迦無尼佛の御教に隨順し、此を世間出世間の兩面に行致つて實行して行くことである、此を本門の題目と云ひ、南無妙法蓮華經と唱へよ、南無妙法蓮華經を信ぜよと御勸めに相成つたものである、觀門の下第七、八、九章で申した處と前掲の圖表と對照して能く其意味を理解して頂きたいのである。

日蓮主義崎人傳

八、津經の題目坂

奥州青森地明會に其人ありと知られたる津經中村先生本土と親交と

の咽喉を扼した地の利に、往來の人の心腹の底をはたかせては日蓮主義鐵錐の欲求を満たせておきなばら、講演後の宴會一杯きこしめしが最後、虹の様な氣焔にメートルはどん／＼上る、客も主人もすつかり吹き捲くられて、屋外は降り積む雪に凍つて居ても、室の中は正に盛夏の風あらしむ。先年津經弘前の小林區署長に榮耀したが、爾來一年有半、やがて靈天動地の大活動を演ずべく、暫し體情偵察の爲に日蓮主義休業中なりしと自稱せるが、先生の性格が果して先生をして靜思の裡に十八ヶ月を我慢せしめ得たか否かは大なる疑問である、今回聖誕七百年記念に再び日蓮主義宣傳業を開店せられたらうである。

弘前の小林區署長の官舎は頗る莊麗で、師團長のそれ以上だと同僚は羨望して居るが、唯一の瑕疵は飲料水の無い事である。先生は提婆品の身置なりとて、毎朝水桶を肩に約二丁計り清水を汲みにて行く、二つの桶に溢るゝ計り落ちた水は中々に重い、美髯髯の高層官何等、署長様が尻つびり腰で水桶を擔つた姿は盡し天下の奇觀である。途中小さい坂がある、坂の中途に稻荷の祠がある、いつも坂まで来ると桶が重くなつて足が踏まない、狐が惡戯をするのかとも思はれる。見ると先生の双頬は紅を早して来た、兩眼は爛々として鏡の如く、ハツタと稻荷の祠をにらんで、大音聲に南無妙法蓮華經、々々、と五六遍唱へると、ア、ラ不思議、水桶は軽く、足はどん／＼進む。後人呼んで題目坂と稱へるだらうとは同僚阿部君の實話である。(國友誌す)



史料

宗門史料

青村編

下總國印旛郡白井臺村	本覺山 淨行寺	同	市原郡崎崎村	一乘山 妙經寺
同 土佐倉村	如意山 經胤寺	同	望陀郡木更津村	滿足山 成就寺
同 千葉郡中野村	長秀山 本城寺	同	山邊郡土氣郷	如意山 本壽寺
同 濱野村	如意山 本行寺	同	同 金谷村	金谷山 滿榮寺
同 北生實村	生中山 妙印寺	同	同 松之郷	松岸山 本松寺
同 千葉村	究竟山 本圓寺	同	同 大網村(檀林)	法流山 本國寺
同 上泉村	寶珠山 寶泉寺	同	同 北之幸谷村	常在山 妙徳寺
同 生實村	寶珠山 本滿寺	同	同 市原郡内田村	如意山 本傳寺
同 同	寶珠山 善勝寺	同	同 長柄郡南白龜領關村	白鳳山 本法寺
上總國山邊郡土氣郷	寶珠山 善勝寺	同	同 望陀郡船目村	船目山 本立寺
同 真龜村	經王山 淨泰寺	同	同 山邊郡大網村	寶珠山 蓮照寺
同 小沼田村	第六山 要本寺	同	同 田中村	寶珠山 法光寺
同 市原郡海士村	海士山 泰安寺	同	同 東金郷	鳳凰山 本漸寺
同 埴生郡町南村	清立山 長圓寺	同	同 同	安國山 西福寺
			同 市原郡高滝小谷田村	長高山 妙典寺
			同 安房郡館山眞倉村	光海山 本蓮寺

(以下次號)

赤化の西伯利亞より還りて

野 口 日 主



思 想 問 題

尼港の事は先づその位にしまして、それからチールといふ所へ参りました、是は尼港より百淫ばかり黒龍江を溯つた所でありましたが、此處は誠に景色のよろしい所でありまして、一方は崖になつて居つて黒龍江がズツと下の方を流れ、さうして又廣々と十里ばかり開けてそこに洲があります、實に風景の佳い所、潮來の十六島へ行つたやうな感じが致しました。英雄おこる所風色よしとすれば、私はこのチールといふやうな所に英雄が起るものであらうと思つた、元の皇帝なども其處から起つたものであるといふ説があります、尤もそれは歴史上からいろ／＼問題があるやうでございますが、蒙古が造つた城址といふのをそこで發見しました。それは小川といふ歴史家と一緒に二人で探したのでありますが、その城といふのはどういふものであるかといふと、蒙古が丁度日蓮聖人の當時の蒙古來で、一方は玄海灘の方から日本を攻め、一方この黒龍江に沿つてチールから樺太へ出て日本を攻めるといふやうに、海陸兩方面から

日本を攻める計畫であつたさうであります。所が玄海灘の方で、所謂國學者からいへば神風、日蓮主義の信者からいへば日蓮聖人の旗風——旗曼荼羅の風で海から來た所の元の兵は、十萬餘騎の敵一朝にして海の藻屑となつて片がついてしまつたから、北の方から攻めて來る軍隊は問題にならなかつた。けれども準備としてはチールへ城を建てたといふ事が昔の書物にありますので、その城址を探ねて見ました所が古瓦が出て、それを持つて歸つたやうな譯でありますが、何となく英雄はそこへ注目する所である、又黒龍江を上り下りすれば其處へはどうしても目が着くので、やはり上陸でもしたくなる所でありまして、それで古い書物にそのチールといふ所に日本式の觀音堂があつたといふことが書いてあります。これが初めに申した日持上人の舊蹟ではあるまいかといふので、その邊まで行つたのでありますが、この邊が觀音堂であつたかと段々崖のやうな所を探ね

ても今はモウ堂はありませぬ、けれどもやはり觀音堂であつたかと思はれるやうな土臺石が草の中から露はれて居りました。是は間宮林藏先生が樺太探検からその方へ進んで行つて調べられたので、其處に觀音堂があつたといふことは今より百二十年前の記録にある次第であります、その日記などに較べて、この邊に觀音堂があつたかと思はれる所に礎石ばかりありました。それから崖を降りて見ると直ぐその傍にニコライの會堂の立派なのが建てられて居る、それは露西亞人の方からしますれば、彼の邊は今より百年前に露西亞が奪ひ取つた所でありまして、そこに日本式の觀音堂や、支那式の建物などがあつては露國の政治をしにくいといふので、日本式とか支那式の建物はみな打壊してしまつて、ニコライの會堂を建てたといふやうな事であつたらしいのであります。所が大きな會堂でありますけれども、内部を見ると誰も居りませぬ、荒れ果てゝ居る、是だけ

大きい會堂で荒れ果て、居つたり、牧師も坊さんも居らぬのは不思議だと思ひまして、それから其處には日本の守備隊が極く僅か居りますので、それ等の人に聽いて見ましたら、イヤあれはバルチザンが来て坊さんを殺してしまつたのだといふことであります。それはどういふやうな殺し方をしたかといふと、バルチザンが尼港から此處へ運げて来て、此の寺へ来て牧師をつかまへて、「お前は神様ナンといふものは無いのに神があるナンと言つて人を欺したり、而も是だけの會堂を建てるには前の皇室から金でも貰つたんだらう、不都合な奴だ」といふのでその會堂の三階に釣鐘がある、それを卸して来て、その牧師を釣鐘と一緒に縛りつけて、崖の高い所から一番深い黒龍江の流れへ沈めてしまつた。如何にも亂暴な事でありませうけれども、彼等は全く物質主義の立場で、さういふ精神界の宗教といふやうな事は無視して居る連中でありませうから、今まで悪い事

をして居る人間を成敗するには丁度適當な成敗であるといふので、萬歳を揚げて運げてしまつたといふことでもあります。其處には一時バルチザンが屯して日本軍と戦つた所の戦跡などがあります、さういふ次第ですから、將來日本人が来た時の便宜に此處を鐘が淵と名けようと思つて居りますがどうですか、といふ話で、「それは結構です、鐘が淵と云つて置ませう」といふので、鐘が淵といふ名をつけて来ました、將來あなた方があの方面へ行つたら探ねて御覽なさい、本當の話であります。そこは河が非常に深い所で、黒龍江は三千呎以上の長い河でありませうけれども、その所が一番深いので、日本の海軍が測つて見ました所が七十尋あつたさうであります。であるから黒龍江の流れ中で一番深い所の淵へその坊さんを沈めてしまつた。けれども私共考へますといふと、此處は昔日本式の觀音堂があつた、それが日持上人の遺蹟とすればやはり南無妙法蓮華經塔が

あつたのを、支那人が何か来て妙法蓮華經では工合が悪いといふので觀音堂が出来た、その觀音堂を打壊してニコライ會堂を建てたとすれば、さういふやうな最期を遂げるといふのもやはり因果應報なりのおぢやナと思つたのであります。

それから翌日になりました所が、林大尉といふ守備隊長が、一つ精神講話をやつて戴きたいと言ふ、それから何處でやりますかといふことになつて、其處は餘り磯邊で適當な家がない、「それでは彼の耶蘇會堂ではどうですか」それは結構だ、彼處でやらう」といふので、そのニコライ堂を掃除をして、日蓮主義の精神講話をやつたのであります、實に痛快でありました。所が内地に居つて吾々が講演しても餘り價値は少いやうであるが、何しろ遠方へ行つて居ること、日本の軍人も淋しいと思つて居つた際でありますから、非常に熱心に聽いて呉れまして一場の講演に依つて、一同國の爲には身を犠牲にする

といふやうな意氣で、大いに興奮して居る際に無線電信がかゝつて來まして、そのチールより百哩ほど川上のケルビーといふ所にバルチザンが大本營を設けて居る、そのバルチザンがチールの日本軍の方へ河を下つて來るといふ無線電信で、それを討伐せよといふ命令があつたさうであります。併しどうも日本軍は漸く五六十人しか居ない、向ふは三千人も來たといふ、けれども討伐に行かなければ日本軍の勇氣がない譯だといふので、それから會議を開きました、參謀會議といふのでせう、私共一緒に居りましたけれどもどうも意味が分りませぬでしたが、それから三四日分の糧食をその邊の土人の家から徵發して來まして、愈々バルチザンを討伐に行くといふことになつた、けれども陸軍でありますから船は無い、漸く二百噸ばかりのパン粉を載せて來た發動機船があつたので、それに五六十人の兵士が乗つて、機關銃を二臺つけて、朝早く討伐に出たのであります。私

もその前の日に國家主義 天皇神聖主義といふやうなことで講演をした際でありますから、非常に縁起の善い事として、袈裟法衣で以てその出征を河邊まで送つた、吐の裏では、どうも此方が五六百人に向ふが三千人では甚だ心許ない、萬一こちらの祈念が外れて全滅にてもなるといふと、法華經の威嚴にも關係すると内々は心配しながらも一生懸命祈念を凝して吉左右を待つた。その時あとに残つたのは、元々極く僅かの守備隊の中の三分の一が残ることになりまして、三分の二が討伐に行つたのでありますが、その晩は何も便りがありませぬ、どうした事かと案じて居りますと、翌日の三時頃になりました所が、大きな軍艦のやうなものが川上からやつて來るのが見える。「ハハハ！是れはいかぬ 我が軍は全滅されてバルチザンの軍艦がやつて來たのだな」と思つた、併し何しろ後へ残つたのは吾々とそれから憲兵の大尉が丁度バン粉を積んで來ましたので、それを留守

隊長に頼んだやうな譯で、戦には馴れて居ない、どうしようかといふので、望遠鏡でその船を見たときには一同の顔の色が蒼くなつて居たかも知れませぬするとその内に一人が「イヤ安心し給へ、國旗だ」といふので、能く見ると日の丸の旗が見えるそれからまあホッとして皆な悦んで、早く來いといつて、應ぐといふやうな譯。見ると中々大きなバルチザンの軍艦で、二千五百噸位もありましたらうか、能く噸数は分りませぬ、軍人に聞いても陸軍の軍人で能く判らない、それは河を渡る船で、水より上の方へ船體が除計出でゐるので、中々大きく見える。それから愈々船が近寄つて來ると、何しろ大きな船なのでこちらも悦んで「萬歳々々」と言うのと、向ふても萬歳を擧げて居る、その内に向ふから「イヤ萬歳はその位で控へて置いて呉れ、まだ後から來るのだ」といふやうな譯で、中々凱旋軍人の意氣山の如してある、成程見て居りました處が、さういふ

大きな軍艦のやうな船が三艘、少し小さいのが五六艘、それから帆船が五六艘、何でも十四五艘の船をズーッと率ゐて、そのチールといふ河の磯へ着いた譯であります。そして戦争にすれば捕虜でありませんが、三千人の避難民を連れて來たといふやうな譯で、一時にそこが小樽の港のやうになつてしまつたそれからア凱旋の祝をしようといふので、何も無いけれども僅かの酒と生魚みたやうなもので祝宴を開いたのであります。

その祝宴を開く前に、捕獲品を一々調べて見たのであります、日本人の軍服、日本軍の用ひた毛布それから日本軍の銃、彈丸といふやうなものが捕獲品の中にあつて、それを破て開いて見たのであります。私共前に尼港で、バルチザンが日本の軍人を裸にして虐殺したといふことを聞いて居りました、それは真が嘘か能く判らなかつた、所が今この捕獲品を破てひらいて見ると、日本人の軍服毛布な

どが出た、それを裏返して見ると何聯隊何中隊の何誰といふやうに名前も書いてありますので、成程これは尼港で我が軍人が裸にされて虐殺されたに違ひない、さうして彼等の奪ひ去つた物が又此處へ戻つて來るといふのは、不思議な因縁であると感じたのであります。それからその三千人の捕虜——所謂避難民の中に日本人の女が一人居りました、天草の女ださうであります、それが露西亞人を俘主にしてバルチザンの仲間になつてケルビーといふ處へ行つて居つたといふことで、彼の問題のニーナといふバルチザンの仲間の女、それから尼港で虐殺をした隊長のトリヤビーンチンその他五六人の首領株の悪い奴が同僚のために殺されたといふ精しい話も、そこで初めて私共聞いたやうな次第でありました。

さういふ話は長くなりますから、何れ又の機會を以て申上げやうと思ひますが、唯私共あゝいふ慘狀を見て痛切に感じましたのは、この日本が今では鬼

にも角にも世界の五大強國の一となつて、外國に對して羽を伸^のびて居るといふのは、全く天皇中心で人心を統一して居るから、これが強い國民であり、立派な國民であるのであつて、若しこの日本の思想界の統一が破れるといふことであつたならば、日本人一人人々々にすれば、露西亞人にも及ばぬ、支那人にも及ばぬ、朝鮮人にも及ばぬだらうと、是れは自分の狭い感^{かん}じてありますけれどもさう思つたのであります。唯だ日本人が世界に名譽あり力あるのは、天皇中心で人心を統一して居る、この思想が日本の最も外國に對して誇り得る、力ある所以である、而してその天皇神聖を大いに説く思想は日蓮主義であります、日蓮主義でなければ天皇神聖といふことは眞に説けないものである。若し天皇神聖といふことが壞れるならば、日本國の思想の統一は破れるのであります、若し日本國の思想の統一が破れれば、今日の日本人は——昔は幸^{さい}知らず、今日の日本人の個人

々々の修養としては、露西亞人にも支那人にも、朝鮮人に對しても私はどういふものかと眞實思はれたのであります。この大切なる日本の天皇中心主義天皇神聖主義を説明し、眞に日本の國體を説明するのは日蓮主義であるといふことを、私は益々深く感じたのであります。どうか諸君もこの意味に於きまして、日本の思想界の爲に、又先刻の本多總裁殿下の説示の意味に基きまして、一層の御奮勵あらんとを希^{こころ}ふ次第であります。

* * * * *

佛陀と神明と

松尾 鼓城

(五) 甲せん歎乙せん歎

ナア斯うなると困つた事だ。法華信の吾等が唯一絶対の尊佛として壽量本佛釋尊に歸依する後から、

モ一人同じ様な日本ノ歴史に現れず神様が存在して居たのでは都合が悪い。國神に就けば本佛に濟まぬ。曩きに引いてある如く聖人の御言葉だけを知つて居れば苦はないのであるが、今現に非常に尊い壽量品の佛様と同格の神様のある事を知つては一往迷はざるを得んではないか。

これは是非とも更に聖人の言葉中より漁り求めてこれが會通をせねばならぬ。これは實に國と法との間に於ける大問題であると思ふ。孝せんと欲すれば忠ならず、忠せんと欲すれば孝ならずの重盛の嗟嘆もさこそと思ひやられるではないか。甲せん歎、乙せん歎の巷に立つた體と云はねばならぬ。

(六) 聖德太子の佛神歸一觀

聖德太子は佛陀と國神に對しては少しも優劣を立つる人ではなかつた。その醫生が佛をこぼち神を排せんとするに對しては、之れを斥けて曰く『眞至佛

神を撃つは即ち聖を破り政を破る厭の卑み叛逆よりも甚し』と佛神を並べて擁護して居らるゝ、又曰く『佛神の始終に背かば共に理の絶極、挑み絶つ可き者に非ず』と。又固陋なる神官者輩に對しては『佛典は西説の神道』又偏固なる僧侶に對しては『神又是れ佛道、佛の五心は神の五心、儒の五常は佛の五大、五行は儒の五行なり、佛神儒、本一道』。又本地垂迹論を唱へて、彼れを擧げ此れをおさゆる者に對しては『吾國は神國なり、佛の本神あり、佛の迹神あり、小乗は國を理すること能はず、唯大乘を學んで専ら神明を貴べ』これ等は皆絶対佛と絶対神との密鎖聯結に力められたる金言である。これから日蓮聖人の御内證を窺はしてもらいたい。

(七) 神の國日本、佛の國月氏

私の淺見からしては甚だ恐れ入ることではあるが聖德太子の『有佛本神、有佛迹神』に對比すべき聖

人のお言葉として、四條金吾許御文の大隅の石體銘を引かれ、尙ほ「八幡大菩薩の御誓ひは、月氏にては法華經を説いて正直捨方便とならせ給ひ、日本國にしては正直の頂きにやどらんと誓ひ給ふ」此の文は正しく八幡大菩薩が、その過去に於て却つて釋尊と應現しられたることを證するものにして「有佛本神」の太子の語と契一するものと稽へられる。尤も此の御文章全體を通して考へては今私の説明は聊か附會の様にもあるかも知れぬが、而し今引證したる此の文面は兎にも角にも八幡大菩薩が月氏に現はれまして法華經を説かれたことになつて居るのであるから、あながちに斥くるには惜しき心地がするのである。

「天竺國を月氏國と申すは佛の出現し給ふべき名也扶桑國をば日本國と申す、豈に聖人出給はざらんや月は西より東へ向へり、月氏の佛法の東へ移るべき相なり、日は東より西に入る、日本國の佛法の月氏

迹の日本なら本體の動くに従つて又動くのであるから、若し斯んなことならば日本の國も大して有難くない國となるではないか。此處に日蓮聖人が此の一語を以て日本國の眞價に裏背せられたものと思ふ。それならば前述第二章に出すが如き夥くの御妙判は何うなるのであるか、イヤあれはあれで結構である。あれは何れも本佛釋尊を中心として觀られたる大斷案であつて、あの場合吾等は小佛小神を離れて大釋尊に目覺めたのである。而して更に國體を中心として觀給ふたる上から拜すれば日月の譬喩豈灼たるものがあるではないか。而し尙ほ進んで聖人の「法國冥合」の眞諦に突入して、その金線に觸れねばならぬ。

(八) 法國冥合 (結論)

我が神國の素質を極度に善美に會了し、此處に初めて夜の明けたる如く聖祖の言に對して釋然たるも

へ還るべき瑞相也、月は光明ならず、在世は但八箇年なり、日は光明かにして月に勝れたり、後五百歳の長き闇を照すべき瑞相なり。」(諺談八幡抄)此の拔萃の文面は何と言つても月氏天竺よりも日東日本國の勝れることを黠默のうちに主張せられたる大文字である。月に對して日を配しらるゝ既に優劣の差赫々嫌々たり、「豈聖人出給はざらんや」の聖人の意義には幾多大なる事々を含蓄して居るではないか。「日本の佛法の月氏へ還るべき瑞相なり」天竺渡來の佛法が神國大乘の地より更に薰發鏡鍊せられて西向するの達見である。月の光明かならず、在世八ヶ年と論呵して日の月に勝れ、末法萬年の闇を照破するの氣焰は光彩萬丈にして、これ日本國の靈國たることを斷言せられて居るのである。その靈國の素質たるや何うしても日本國夫れ其のものに前に述べたる四章の如き本佛同格の尊靈を有して居なくては駄目である。鍍金は剥ける、影は無くなる。本地垂迹論では、

のがある。「日本は一向純國の機なり」又「圓浮第一の本尊此國に立つべし」又「本有の靈山とは此の娑婆世界なり、中にも日本國なり」又「月支震旦にも勝れ八萬の國にも超えたる國」等の聖語は大いなる意義を以て國體中心の響と聞かれるのである。

此等の金言の外に、一大強音として吾人の耳朵に響くものは「王法佛法に冥し佛法王法に合す」の所謂「法國冥合」の一節である。此の語であるが、此の一語は如何に國體と大法との根本的解決を物語つて居るか、此の一語に見よ、法の量目と國の量目とに少しの差を見出すことが出來ぬ。法の中心、法の立場を認め、又國の中心、國の立場を認め、而して兩者を平等に融治しられたるものにして、冥合とは眞にその名の如くである。

法より國が輕かつたならば、それは不具の夫婦である。法が一尺ならば國も亦一尺であらねばならぬ國に偏するものが國を重く見んとし、法に偏するも

のが法を重く見んとするのは、丁度、人法論に於て不
二の境域を脱し、或は人を重く見、或は法を重く見
んとすると同じ様なものであらうと思ふ。法と國
とは澄明なる両面の清鏡を對照したものと同じこと
であらねばならぬ。若し一方の鏡に一點の雲翳があ
つたならば、直ちに一方の鏡にはその雲翳が映ずる
てはないか。大乘の妙法と大乘の神國と色も香も同
様の資格を帯びたるものが誠に割符を合せたるが如
くでなくてはならぬ。

左の文は法國に關するものではない、佛性と佛陀
と及び信仰との關係に就いて述べられたる文句であ
るが、これを法國の場合に適用して最も適切に思は
れるからそれを引くことにしやう。「我が己心中の佛
性南無妙法蓮華經とよばれて顯はれ給ふ處を佛とは
云ふなり、譬は龍の中の鳥なれば空とぶ鳥のよばれ
て集まるが如し、空とぶ鳥の集まれば龍の中の鳥も
出てんとするが如し」龍の中の鳥が鶯であつて龍の

外の鳥が目白であつたならば鶯がいくら鳴いても目
白は寄つて來ない。鶯は鶯で集まり、目白は目白に
集ることは實驗家の能く知つて居る處である。鶯の
日本國に鶯の妙法が集つてこそ眞にこれが法國冥合
である。法華經壽量品の顯本し給へる大佛陀と、日
本國の神聖祖神が同量同格なることは所以ありと謂
つべしである。只一は法として佛陀、一は國として
の神明との違目あるのみである。扇の表裏何れかに
大小あらんやである。

せん云云、此文の心は日本國は京鎌倉筑紫筑西陸奥
遠きも近きも法華一乘の機のみ有りて、上も下も貴
も賤も持戒も破戒も男も女も皆よしなべて法華經に
て成佛すべき國なりと云ふ文なり、譬は峴峯山に石
なく蓬萊山に毒なきが如く日本國は純らに法華經の

聖祖曰く「かゝる國かゝる時には何れの經をか弘
むべき耶、答云法華經を弘むべきなり、其故は法華
經云闍浮提の内に廣く流布せしめて斷絶せざらしめ
ん等云云、瑜伽論には丑寅の隅に大乘妙法蓮華經の
流布すべき小國ありと見えたり、安然和尚云く我日
本國等云云、天竺よりは丑寅の角に此日本國は當
也、又慧心僧都の一乘要決に云日本一州圓機純一に
して朝野遠近同く一乘に歸し縹素貴賤悉く成佛を期
國なり」(法華初心成佛妙。かさねて聖德太子の文を引
いてこれを證明し本論を完結しやう。
「吾國者神國、有佛本神、有佛迹神、小乘不能干國
理、唯學大乘專貴神明」嗚呼尊い哉我國體。嗚呼貴
い哉妙法。南無妙法蓮華經。あなとうと。

改造運動と信仰 (承前)

文學士 武田 顯龍

更に我國現下の思想の中で改善を要するものは個
人主義の思想であります。勿論學問としての個人主
義には大に研究すべき餘地もあり又今迄随分文明の
進歩に貢献した點もあつたてでありませうが兎に角今
日の様な産業組織の社會及び今日の様な經濟組織の
社會状態にあつて何物よりも個人を大切と視て個人
を本位とする思想が一般國民に行き亘り是が國民の

生活様式に表はれて來ると爰に色々の缺陷と弊害と
を生ずることは否定することが出來ません。昨年十
二月末の新聞紙の報道する處に據りまするのに東京
市の社會局で都下の工場労働者數百人に自個が大切
か國家が大切かと云ふ問題を出して解答を求めたと
ころが國家が大切だと云ふ解答者が百五十餘人なる
に對して自個が大切だと云ふ解答者が二百五十餘人

て國家を大切なりとする者に對し自個を大切なりとするものが約倍數であると云ふことは如何に今日我國民が個人本位であるかと云ふ事が窺はれるのであつて古來からの愛國的熱情が日々夜々に冷却しつゝあると云ふことを實證するものであると思ふ。産業革命に依て個人的生産組織が破壊せられ機械工業となり集團的組織となつて昔の様に一人て生産品の全體を作成すると云ふのでなく分業的になつて一人ては僅に生産品の一部分を作成するに留る様な生産組織になつた今日は昔の儘の家族制度は日に廢れて行かざるを得ない。人々各個が獨立の生活の立脚地を樹立すべき今日にあつては昔の儘の家族制度には大に改善を要すべき點が澤山ある。昔の家族制度に従へば職業が世襲的であつて醫者の兒は醫者に鍛冶屋の兒は鍛冶屋に成ると云ふのであつたが親の個性と兒の個性とが必しも同様ではないから親は醫者に適したけれども兒は大工に適した個性を備へて居ると

云ふ場合もあるし親は鍛冶屋に適した個性の持ち主だが兒は政治家に相應しい個性の持ち主だと云ふ様な場合がある、而して各人が各々個性に基き天賦の材能を充分に發揮することが社會的見地からも個人的見地からも兩方面から眺めて道徳的であり且つ經濟的に有益なことである。従て家に固定した職業に依て個人を壓迫した舊來の家族制度には此の點に大なる缺點があり今日の個人本位の生産組織がより進歩的であると云ふ事が云ひ得られる。従て今日舊來の家族制度が自然と廢れて次第々々に家庭制度に向ひつゝあると云ふ事は否み得ない事實である。斯の如くして個人本位の思潮が濃厚の度を加へつゝあるのであるが産業的に個人本位の思潮は是認し得るとするも是が一度生活様式と成つて家庭の上に社會生活の上に表はれた時は是を道徳的見地から眺めると寒心に堪えないことが起り來るのであります。個人本位の思潮に附帶して起る者は權利義務の考でありま

す。權利義務の考は是が公正に考へられ又行はる時は立派な考でありまして例へば自個の人格を他人に認めさせ又自分が自個の人格を主張するとは各人の權利でありますが權利を有すると同時に他人の人格を認める義務を有して居ります、即ち自個の人格を主張する權利と他人の人格を尊重する義務と相峙つて始めて人間の道徳的生活は公正に行はれるので權利義務は斯ふ云ふ風に見れば良い考でありますが權利のみ主張すると悪い考と考るのであります、例へば或る金持ちが有り餘る金で日本に生産された米全部を買ふのは自由であつて是が處分法は其買手たる金持ちの權利内であるからと云つて米全部を海に投じて幾多の人を飢餓に瀕せしむると云ふ様な場合に此の金持ちの行爲は果して妥當だと云へませうか。又金持ちが東京市の如き大都會の地所を不用なのに買占めて荒蕪地として置いたなら其の行爲は道徳的に見て許容する事が出来るてせうか否な法律的に

云つても必しも權利のみを保護するにあらずして正義を保護すると云ふ法理上の解釋が優勢に成つて居る今日或は法律上の罪人と成るかも知れない。又親は兒供を教育する義務があり兒供は親に對して充分立派な者にして貰ふだけの權利があるからと云つて親の貧乏な經濟状態も考へずに多額の教育費を要求して敢て譲らないと云ふ様な場合果して此の行爲が贊同に價するでありませうか權利義務と云ふ觀念は觀念其自體としては決して拒斥すべきものではないけれども元來が理智の範圍を出でざるものである。従て權利義務の觀念に捕はれたる生活は理智一偏の生活であつて冷たき事水の如き冬の生活であるが人間の生活には花咲く樂く暖き春の生活即感情の生活がなければならぬし又實際此の感情生活のあるのが如實の實相である。此の理智と感情と意志との三者の圓滿なる調和を得たる生活の基調となり同時に極致をなすもの即ち理智と感情と意志との三者の調和

的生活其のものは信仰生活である。信仰生活に這入るのには先づ第一に信仰の對象が哲學的に觀て社會的に觀て國家的に觀て宗教心理學の上から觀て道德的に觀て一般宗教學の上から觀て完全なりや否やの判斷をせなければならぬ。爰に卓拔せる理智の作用が必要である。尤も過去の光榮ある機縁に依て卓拔なる理智の働さ無くとも幸に正しき信仰に入るを得又は信の一念強盛なる時は信に依て理智に反て開發せらるるのである即ち日蓮聖人の一念三千を知らざる者には佛大慈悲を起して妙法五字の袋の中に此の珠を包みて末代幼稚の頭に懸さしめ給ふと仰せられて居るのは此の間の消息を傳へられたものであるが兎に角信に入る前に理智を働かすなり又は入信の結果理智を開發せられるなり何れにしても信仰生活に理智の輝は不可離的に附帯したものである。而して信仰は宗教心理學の上から云つて決して直線的斜面的に向上するものではなくて時に急進的に進み又

退き一高一低一進一退パイプレーションを描いて進むものであつて其處に猛烈なる意志の作用が伴はなければ退轉し易いものである。強盛なる信仰生活殊に正しき信仰生活には偉大なる意志作用を伴はなければならぬ日蓮聖人の所謂縱ひ頭をば鋸にて引き切り扇をば稜鋒を以てつつき足にはぼだしを打ちて鏝を以て揉むとも命のかよはんほどは南無妙法蓮華經と唱へて唱へ死に死ぬるならばと云ふ不惜身命の意志活動が伴はなければならぬし又正法信仰に入れば自然と此の意志活動が伴ふものである。更に信仰生活には感情が伴ふものでシユライエルマツヘルが宗教は感情なりと斷じた位に宗教には感情は附き物である宗教生活信仰生活とは、云はば感應道交の生活である。佛陀と僧寶との大慈悲大活動に感激し正法を理解し是を受持せんとの意志活動が信仰生活であつて受持する處に又法悦歡喜の情が白熱化して紅蓮の焰と燃へて來るのである。即ち日蓮聖人の所

謂奥き所頭を以て法華經に代ふるは砂礫を以て黄金に代ふるなりと云はれ又佐渡の雪中吹き抜け漏り通しの覆ふものもなく防ぐ壁なき塚原三昧堂に於て衣の袖に積る雪を眺めて大覺世尊衣を以て覆はせ給ふと仰せられた法悦歡喜の信仰生活こそ其の信仰生活で秋霜烈日の中に鳥歌ふ春の長閑けさを覺ふるてはないか。轉軻孤獨の窮乏者の憐みの聲をこち吹く風と聞きなして涙の二等分をはかる世の所謂慈善者よ願くば鳥と蟲とは泣けども涙落ちず日蓮は泣かねども涙眼なしの御言葉に卿等の心耳を開き心眼以て凝視し給はらん事を。個人本位に立脚する權利義務の生活を落葉カサカサと鳴る枯淡肌寒さ木枯しに比するならば信仰生活は日ねもすのたりのたりかなの感ある春の海にも比すべきもので優劣は云はずして明かでありませう。

更に個人主義が家庭に於て行はれるとすると親兒の關係が圓滿に行かないのみか孝行の道德が根本か

ら破壊せられる。何故かと云ふと親が見を愛撫し養育することは親の本能的欲求であつて見供を貯蓄銀の代行物と心得て晩生を托する左券のつもりで見を養育する者は先づない。若し左様な親があるとすら其の親の愛は極て不純なもので不心得な親である。兒供の爲に云ふに忍びざる勞苦を爲すとも子供に甘へられ笑顔を見せられた時には直に勞苦を忘れ子供を眼の中へても入れ度い位なのが親の至情であつて如何に見供が成仁し様と大人にならうと子供の命のあらん限り親の此の至情には變りのあるものではない。從て親は子供を養育すると云ふこと其自體に於て快樂を享受しつつあるのであつて子供を養育する苦勞其のものが同時に親には快樂なのである。親が子を育てると云ふ事は親の社會的義務であるが其の義務の遂行に依て享有すべき權利の目的物は子供自體に存するのではなくて養育の勞苦其のものに存する。從て親は子供に孝行を強要すべき權利

がなく子供には親に孝行をすべき義務がないと云ふ事に成つて孝行道德を根本から破壊し親は親として獨立人格であり兒は兒で獨立人格であつて人格の尊重は相互的なるを原則とするが故に子供より特に親を尊ばねばならぬと云ふ理由は泡沫も存しないのであると云ふ曲論を將來するのである。個人主義を生活様式の上に採用するならば家庭生活の上になつてすら斯の如き暴論に陥いつて名分と大義を紊し秩序を破壊する結果となるのである、然るに今日國民の多くが前述の如く個人主義に傾きつつあつて然も是が生活様式に表はれんとしつあることは寒心に堪えざる點で終に改造を要する重要な點である。(未完)



記事

聖誕七百年慶讃法 要及講演

大正十年を迎へて我等に第一印象となつたものは、聖誕七百年の春といふことであつた。大い頭の中に描かれたものは、之に處する覚悟であつた。我等の一生には、またとない此の佳節に處するその覚悟の如何は、たしかに日蓮主義の將來を下するに足る光りてなければならぬ筈だ。

廣宣流布することは大地を的とすと斷ぜられて創められた、妙法の光明が、年と共に輝くのは當然なることである。「大善は大惡より起る」として惡思想の流れて來た近年に、榮然としてその光彩を輝かしたのは一大偉業で海に覆ふたへぬところであるが、然し一天四海皆妙法の理想はまだ、前途遙遠である。一國內すらまだ勝法の聲がなかく、盛んに聞えてを現在、「敵は多勢なり」法王の軍兵は依然として無勢だ。いやが上にも自重し結束遠逝せねばならぬ大切な巻でなくてはならぬ。

此の佳辰を記念すべく記念事業の名のもとに矢野にお祭り騒ぎす

べきではあるまい、誠信以て宣傳を計るべきであらう。無反省なる獅子王の折伏を愛用すべきではあるまい。機軸以て修行すべきであらう。蓋し我が徒の記念して進むところ正に自行化他に亘つて唱ふる南無妙法蓮華經それであらねばならぬ。

春秋三十星霜、王城の南東に位いして正しく法鼓を鳴らし來り、妙法の教線いよ／＼進展し來つた我が統一國が天下に呼ばんとする聖誕七百年の記念講演の盛況は豫測するに難からず、豫め第二會場の設備さへするほどであつた。

二月十三日の日曜の午後一時から大會は開かれた。聖殿には總裁閣下を中心とし紫紅の御僧數十名と、烏紋正しい數名の樂人とが居ならび、増築された大講堂には早くも一千の信徒うち集うて立錫の地もない盛況を呈した。鐘一打、鼓々と響けば大導師は恭しく三寶隨尊を勧請し奉り、こゝに聖誕七百年慶讃の大法要は嚴修せられた一千の心から流れ出る異體同心の讚經唱題の吟り——大講堂を動かさんばかりの吟りが、七百年前にあげられたる嗚々一聲の力にその源を發したることを思ふとき、聖誕に對して無限の感謝と讚歎とが催される。更に四海が一齊に妙法化される大理想に想到すれば、我等の一聲にも亦偉大の光りと力とがこもらざるを得ぬ。

ついで講演はしつちらはれた。明治大帝と日蓮聖人の閣下に、至誠の權化とも稱すべき大道大將の雄姿を壇上に仰いだときは、早や正門を開き、櫻々として來る聽衆は第二會場なる妙經寺の大廣間に案内せねばならなかつた。そして此處もまた直ぐ満員となつた。こゝでは日生親下が先づ講演せられ、講師は交替して二回づゝ講演

せられたのである。笹川臨風先生は文化運動と鎌倉時代と題して、その豊富な史蹟を披瀝され、次いで陛下は壇上に立つて榮えた電光をあげつゝ、五大部の特神と題して日蓮主義の本領を結叫せられたが、この光景はそゞろ往年大聖人の師子吼を偲ばしめるものがあつた。

慶賀記念の用意は十二分に徹底して五時半開會した。祝下著「日蓮聖人降誕七百年」なる統一臨時一千五百部は頌興せられ、紅白の慶賀誕生餅を懐にして歸りゆく善男善女の鬨裏は恐らく一つとして法悦無量、歡喜奉行的光明に照されざるはなく、一代不忘の大印象を刻まれたことであつたらう。(義郎)

各地の思想戦

●豊橋地方 一月十六日、妙圓寺に於て少年會開會、來會兒童四百餘名。「輪語奉讀」加藤少將。「開會宣言」松本堅晴。「お芽出う」加藤少將。「福の神」大竹直治。△廿一日、第十五師團將校團の爲に講演開會。「國民思想善導の方針」野澤少將。△同日、統一團分團主催思想問題大講演會開會、聴衆滿堂立錫の餘地無し。「開會の辭」加藤少將。「社會主義批判」野澤少將。△廿二日、縣立第四中學校學生の爲に講演。「強く生きよ」野澤少將。△同日、二川町在郷軍人主催國民思想大講演會開會、聴衆八百。「現代思想の調整」野澤少將。

●京都教報 一月八日、本正寺に於て二樂會和講演開會。「宗教生活」上田師。

●神戸統一團研究會 一月十二日、兵庫布教所に於て初會開會。定期前既に堂内立錫の餘地なし、先づお修法に始まり、終りて愈々懸井上人の開目抄講義に移る。言々句々肺腑を衝いて出て、而も親切懇導を極めたる講義振りに、満堂寂として咳の聲だに聞えず、聴く者をして神妙の境を彷彿するの感あらしむ、本年最初の法悦裡に閉會しぬ。△十九日、兵庫布教所に於て研究會例會開會、開目抄講義あり。△廿日、統一團支部同仁の親睦と將來の團結を強固にし法國の爲め爲す所あらしめん目的を以て、市内信友俱樂部に於て新年會開會す。懸井支部代表より、團員今後に處するの理想等に關し、一場の調話あり、尙二三氏立つて各自熱烈なる希望所感等を述べ終て餘興に琵琶三曲合奏あり、來會者二百餘名目出度散會せり。△廿一日、下山手通東神倉庫共友俱樂部に於て研究會開會。懸井講師の無量義經講義ありき。

●神戸はちす婦人會 廿三日、統一團神戸支部にて新年會を催す當日は稀なる好日和にて、來會者は定期早くより詰めかけ、選登者なき有様にて大混雜を極めたり。會は嚴かなる修法に始まり、渡邊義治氏の開會の辭、十數名の愛らしき少年少女の合唱あり、懸井師の御妙判拜讀の後、折りよく來會せられし萩原本山部長の法話ありしは、本會にとりては幸福なりき。種々餘興後、萬歳聲裡に洋々たる新年の希望を懐いて三々伍々に家路につきぬ。

●岡山縣下 一月元朝、和氣町本成寺に於て國語會。「大正九年中に於ける事業改宗者報告」原田日男。△七日、和氣町久崎國太氏

の本質及其屬性」有田安道師。「新年の所感」萩原部長。△十一日、本山方丈に於て健兒會開會。山口、久世兩氏出演。△六日、方丈に於て護正會新年會開會、頗る盛會。△十三日、妙滿寺に於て國光婦人會新年大會開會、來會者百五十名。萩原部長初梵音ありて、次に餘興宇都宮主計之介氏の統一節、「松葉ヶ谷の湯」、「良觀の雨乞」の二節あり、金光師の決疑報告後、福引あつて笑聲裡に散會。△十六日、護正婦人會、妙光婦人會開會、有田、金光、萩原各師出席。△同日、方丈にて健兒會開會。△十八日、寂光婦人會、萩原僧正出席。△廿日、妙滿寺講堂に於て、統一團主催日蓮主義大講演會開會。此日雨天なれども熱烈なる求道者來聽聽者滿堂。「新思想と日蓮主義」野澤少將。「辛酉の年所感」佐藤中將。△廿一日、健兒會、辻、久世兩氏出演。△廿六日、妙滿寺講堂に於て、健兒會主催の村岡本量師決疑和伽講演會を開會。辻君、土持師、有田師の講演後、村岡師決疑の挨拶、健兒會總代萩清子嬢、告別の辭を朗讀し、師弟涙に袖を濡して閉會。△廿八日、妙滿寺に於て岡山會執行、萩原部長出席。

●大阪教況 統一團大阪支部設立已來、本多祝下の法華經要文講義は、毎會盛況を加へつゝありしが、昨年十二月七、八兩日、大紙俱樂部を最終として、十六回に渉る要文講義も終了せり。法華の眞髓に悟入し、不退の信念に住する者少なからず、次回の經書要文講義を期待して待つ者非常に多しと。△一月十三日、蓮成寺に於て新年會開會。法要嚴修後、山主上田師は「新年に於ける希望と信念」の題下に就き講演あり。△廿六日、廣野氏宅にて婦人會開會。「信仰と

宅にて講演。「佛神人の關係」原田日男。△十日、和氣會報法會を岩崎泰市氏宅にて開會。「お多福面と修身」原田日男。△十五日、和氣本成寺婦人會開會。「婦人の信仰」原田日男。△十六日、同信會。「本年の勉勵」原田日男。△十七日、赤磐郡可具平松吾三郎氏宅にて講演。「大乘の法門」原田日男。△廿八日、天瀬修養會。「日蓮聖人傳」原田日男。「吾人の心得」梶野美大。「修養に就て」須波銀治。△一月一日、津山町本蓮寺に於て新年國語會嚴修。「日蓮聖人の新年觀」能仁一十師。△同日、苦田郡林田村青年團初集會。「青年の覺悟」能仁一十師。△同日、林田村和氣善壽氏宅に同信會開會。△四日、丹波郡廣野村青年團總會を同村小學校にて開會。「國民思想の基調」能仁一十師、聴衆約四百盛會を極む。△五日、久米郡加美村青年團創立五十周年記念大會開會。「修養と宗教的訓練」和氣善壽氏。「國家親の徹底意味」能仁一十師。△一月六日より二月三日まで津山之上町弘通所に寒修行會を執行す。能仁一十師は、種々振舞舞舞書、法華題目抄を授講す。△十五日、苦田村郷保田口政造氏宅に法話會を開會。△十六日、高野村に日蓮主義青年會を開會す。

●伯耆松崎地方 一月五日、松崎町前田基一郎氏宅にて開會。「信仰の徳」富田日進。△十日、松崎小學校處女會に於て、「勤勞と女性」富田日進。△廿日、由良町竹森秀藏氏宅にて講演。「教法の威力」富田日進。廿三日、松崎本立寺にて聖樂團例會講演。「日蓮聖人の教義(其一)」富田日進。△廿七日、本郷村市橋氏宅にて家庭法話。「釋尊傳(其一)」富田日進。

●朝鮮釜山教報 一月八日、釜山郵便局電話室にて講演。「女子

と鏡「横山正師」△廿二日、釜山郵便局集合所にて開演。「慈恵の浄化」横山正師。因に釜山郵便局にては、事務員相互の人格を向上せしむる爲め、毎月二回、横山師を聘して、男子部、女子部に分ち、修養講話を開演する事に決す。

日蓮聖人銅像建設

日蓮上人聖誕七百年記念事業として、東京市内淺草公園附近元慶印寺跡の淨土を卜し、工事費約五萬五千圓の豫算にて、上人の銅像を建設し、上人の偉大なる人格を通して以て思想善導國民教化の上で貢獻すべく大迫大善師により計畫せられ去る二月廿七日を以て地鎮式を舉行せられたり。左に勸募の辭を掲ぐ。

民衆教化の必要今日より急なるは無く就中都市の住民に於て特にその緊切なるを覺ゆ而して東京市に於ける民衆の集合地は淺草公園を以て第一と爲す若しこの淺草公園に集敷する民衆に對して日夜に何等かの教化を興ふるを得ばその影響する所必ず多大なるものあらん此に於て乎同志相議し理想的なる日蓮聖人の銅像を建設せんとし地を十二階附近元慶印寺跡に卜し工を新界の大家岡崎輝聲氏に託し本年申を期してその工を竣らんとす慶印寺は不惜身命の行者日經上人の開創する所今や市區改正の爲めに牛込原町に轉じ跡地は新境界と稱して民衆娛樂の地たらんとす茲に聖地の遺蹟を愾きその中央の地を淨めて偉聖日蓮の銅像を建設せんとするなり工費は發起人中

に於て支辨の議ありしも時恰も偉聖日蓮菩薩七百年に相當するを以て記念事業の一としてこの舉を世間に清榮し清淨なる喜捨を得て大善功德を分たんと欲し任意の寄附を集むるに外ならず由來東京の住民は日蓮崇拜の精神頗る旺盛なれば偉聖の風貌に接し觸目禮拜の間に日蓮の如き剛健、慈恵、慈愛、熱誠、抱負、信仰、法悦、満足を得又立正安國、知法思國、大義名分、父母孝養、衆生相互恩、開顯統一、皆備妙法の大精神に感字するあらばその效果蓋し尠少ならざるべし日蓮聖人曰く日は東より出でて、西を照す日處づれば是隱ると大方の士女清き一片の贊同を寄せられんことを。

統一團札幌支部發會式

願みれば大正二年夏、第七師團長林將軍の發願にて北海全道の民心を覺醒し、健全なる國民思想を喚起すべく、本多總裁親下の波道となり、旭川札幌を中心に、前後三十日間、約百數十回の大獅子吼に學生會を設立したりしが、時の未だ到らざりしか一には林將軍の客死するあり、此の淨業も中途に頓挫したりしが、爾來茲に八週年聖誕再び回り來りて、札幌區の同志相謀りて統一團支部を創立し、大正十年一月三十日を以て、本部より特派せられたる國友文學士司會の下に、盛大なる發會式を舉ぐ、左に概況を同地發行北海タイムス紙より轉載す。

統一團發圖式

統一團札幌支部發圖式は既報の如く昨廿日午前十一時より札幌區白石町同支部に於て舉行されたるが當日は本部社會部長國友日斌氏特派せられ其の他來賓として安藤道義村田樹新木田本社員出席並に團員百五十有餘名參會盛況を極め發圖式に先ちて信徒改宗式從來本妙法華宗に屬し今回本同上に改むるを舉行しそれより發圖式に移り讀經に始まり次で兒玉舜澄氏の開會の宣言、佐藤三三氏の教育勸語奉讀、兒玉氏の趣意書朗讀等ありて來賓代表安東俊明氏の祝詞演說北國勸次郎氏各地よりの祝電朗讀等ありて大河原直四郎氏謝辭を述べ閉會し次で團員並に來賓の紀念攝影ありて最後に國友師の團員に對する訓示演說ありて四時半盛會裡に散會せり尙當日役員として札幌支部長に水澤隆正氏、副部長に兒玉舜澄氏任命され理事幹事及評議員若干名は追て發表さるべしと。

日蓮主義宣傳の講演會

同日夜統一團支部創立趣旨宣言に兼て、宗祖聖誕七百年記念大講演會を、同地公會堂時計臺に開催す。概況左の如し。(小樽新聞記事)

既報の如く統一團支部主催の日蓮主義宣傳講演會は一昨廿日午後六時から札幌區時計臺に開かれた定刻司會者側から兒玉舜澄君が登壇して開會の挨拶に次ぎ今正是時と題して學問に對する價值觀念の確證を説き國を誤る曲學阿世の徒を痛罵し人心を誤る曲邪教を論

難し日蓮の教義を述べて降壇次に高野精一氏登壇「日蓮主義と現代思潮」と題し消々一時間半に渉りて人格の存在は體肉合流生活に始まるのだと云ひ體と肉との關係を考慮した宗教が即ち日蓮主義なりと論破し日蓮の教義の根柢が國家的觀念の立場に在ることを述べ進んで歐米各國に渉りつゝある思想問題、労働問題等は日蓮主義の信仰に依りて解決すべしと述べて降壇次に田久保日斌氏登壇日蓮主義の本尊」と題し日蓮主義の嚴格なる教義の半面に於て慈悲を説くのが即ち其の本尊であると述べ降壇次で統一團本部より派遣せられた文學士國友日斌氏は「感激と信仰」につきて思想を離れて經濟政治教育、宗教を論ずべからずとて各國の歴史を檢査して其聲與の跡を見るに必ず思想の興隆に依りて生ずることを述べ思想の善導は善良なる宗教に依らざるべからずと述べて降壇した此日聴衆は五百多大の感動を興へて十時散會した。



目 次

統一團の使命(時言).....	本多日生
教育勅語と思想問題.....	本多日生
本經祖書要文講義.....	本多日生
日蓮聖人教義綱要.....	井村日成
宗門史料.....	山根青村
改造運動と信仰.....	武田顯龍
記事報道十數件	